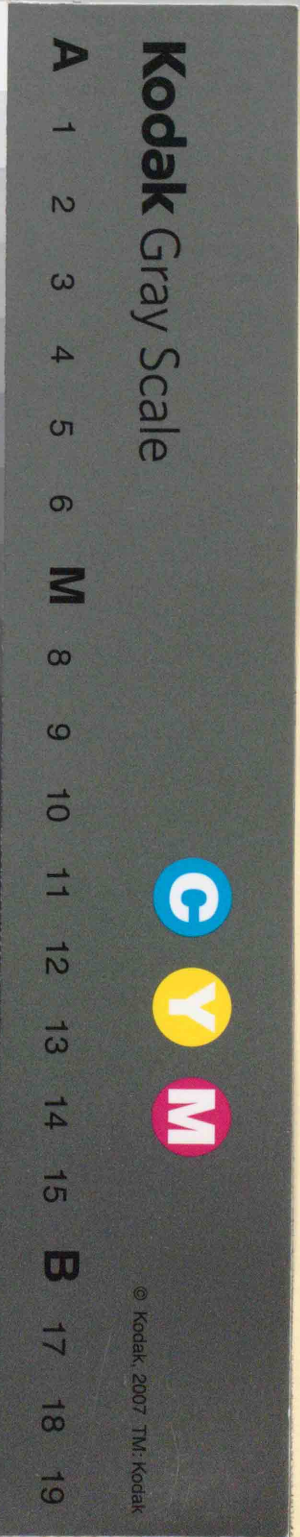
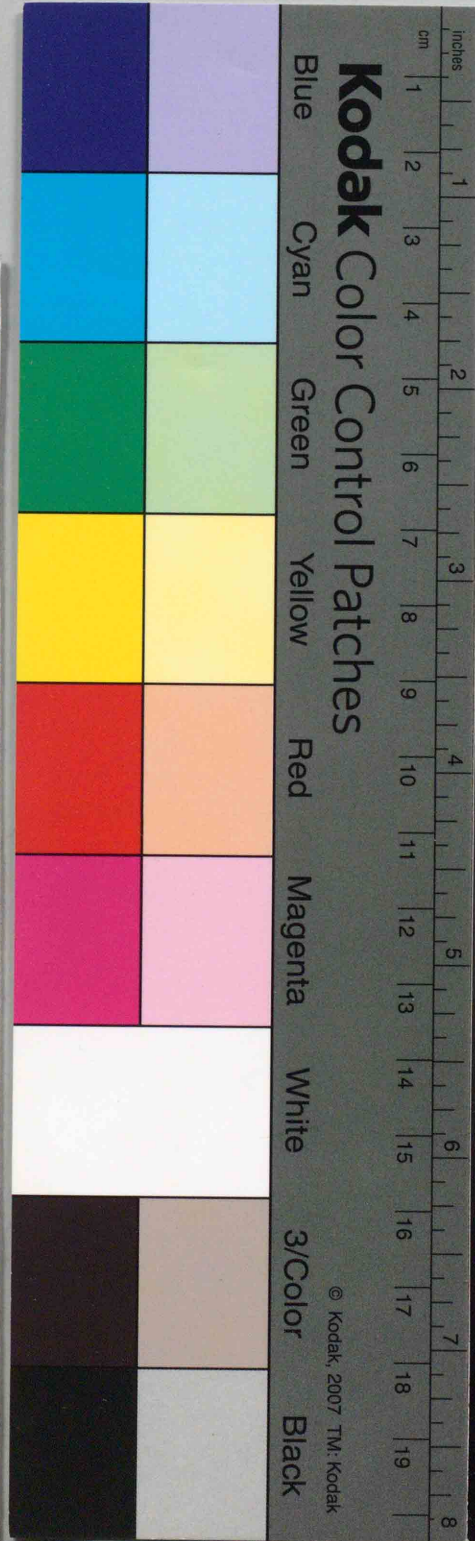


訂新
新撰國語讀本
卷八

3759
Da19
資料室



41530

教科書文庫

| |
|----------------|
| 4 |
| 8/0 |
| 41-1925 |
| 200030 1496 |



© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

日二十二月一年四十正大
濟定檢省部文
用科語國校學中

資料室

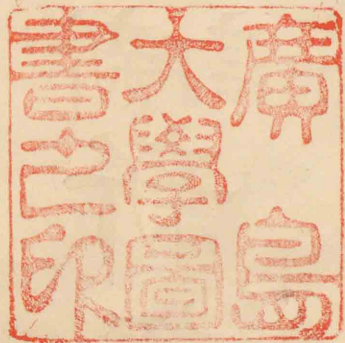
3708
S219

訂新撰國語讀本

文學博士佐多政一編

大町芳衛
武島又次郎
補修
杉敏介

株式會社
明治書院



新撰國語讀本卷八目次

| | | |
|-----------|-------|----|
| 一 秋の氣魄 | 豊島與志雄 | 一 |
| 二 月夜の美觀 上 | 高山樗牛 | 七 |
| 三 月夜の美觀 下 | | 二 |
| 四 百蟲譜 | 横井也有 | 一七 |
| 五 述 懷 | 本居宣長 | 三 |
| 六 小品四章 | | 二六 |
| 一、夜 學 | 中島廣足 | 二七 |
| 二、蟲の音 | 石川依平 | 二七 |
| 三、わざと法 | 村田春海 | 二六 |
| 四、交友の道 | 白河樂翁 | 二六 |

| | | |
|------------|------|----|
| 七 友 道 | 網島梁川 | 三 |
| 八 古調新調(俳句) | | 三 |
| 九 詩 境 | 夏目漱石 | 三 |
| 一〇 靈 感上 | 徳富蘇峯 | 四七 |
| 一一 靈 感下 | | 五一 |
| 一二 樹の根 | 和辻哲郎 | 五六 |
| 一三 出 廬(詩) | 土井晚翠 | 六四 |
| 一四 人生の熱愛者 | 安倍能成 | 六七 |
| 一五 歌人西行上 | 藤岡東圃 | 七三 |
| 一六 歌人西行下 | | 七九 |
| 一七 銀の猫 | 上田秋成 | 八三 |
| 一八 鎌倉三代 | (増鏡) | 八九 |

| | | |
|-------------|-------|-----|
| 一九 徒然草抄 | 吉田兼好 | 九六 |
| 一 花と月 | | 九六 |
| 二、四季のあはれ | | 九六 |
| 三、名 利 | | 一〇一 |
| 四、虚 言 | | 一〇一 |
| 五、己を知る | | 一〇四 |
| 二〇 生活の根本的基礎 | 木村泰賢 | 一〇六 |
| 二一 世界の四聖上 | 高山樗牛 | 一一三 |
| 二二 世界の四聖下 | | 一一〇 |
| 二三 落花の雪 | (太平記) | 一一五 |
| 二四 羽 衣(謠曲) | | 一一〇 |
| 二五 富士の山(狂歌) | | 一一七 |

二六 大佛殿の柱……………十返舎一九：一〇〇



新訂新撰國語讀本卷八

一 秋の氣魄

秋と言へば人は直に紅葉を聯想する。併し紅葉そのものは、秋の本質とはかなり縁遠いものであると思ふ。

楓の赤色から銀杏の黄色に至るまでの様様な紅葉の色彩は、その色彩から直接に來る感じは、しみじみとした專念の秋の感じは餘程距つてゐる。都會にゐてはさうでもないが、田舎に一步踏出して見ると、山裾の木立の紅葉や、田畑の熟しきつた黄色な農作物や、赤赤とさす日脚などは、それを其のまま抽出して觀する時には、寧ろ殘暑に屬すべきもので、眞の秋の領域ではない。試に吾吾の住

宅や居室を其等の色彩の何れかで塗るとしたら、吾々の生活気分は甚しく落着のないものとなるだらう。さうして、この落着のないのは、秋のものあはれな気分とは全く別種のものである。

紅葉に秋の氣分を興へるのは、紅葉の中の活力の缺除である。私は茲に緑葉が何故に紅葉するかといふ科學的説明は試みない。唯紅葉に活力の缺除せる事だけを言へば足りる。假に野山の紅葉があつた儘の色彩で生き生きと生育する世界を想像して見れば、それが秋の世界だとは誰も言ひ得ないであらう。活力のない紅葉なればこそ秋にふさはしいものとなる。秋の山野に冠する赤や黄の色彩は、房房とした少年の緑髪ではなくして、生活をしつくした初老の人の赤毛である。

生活力のない紅葉は一夜の冷風にさへ散つてゆく。この落葉こそ眞實に秋のものである。庭に散落ちる桐の一葉は言ふ迄もなく、

林の中に舞落ちる無數の木の葉、又は半ば霜枯れた野の草葉に至るまで、悉く秋の氣分に濃く染められてゐる。かさかさこ鳴る落葉を踏んで、林間の小徑を辿る時、人は最も深く秋を感じる。

そよそよと渡る微風に、常緑樹の病葉や落葉樹の紅葉は、何等の意志もなく、如何にも自然に、梢から地上へ舞落ちる。地のものは地へ。と大自然の聲が囁く。しかも地面へ落ちついた枯葉は、なほ其處に安住し得ないで、風のまにまに何處へともなく吹散らされる。その方向を追うて林から出れば、收穫後の廣廣とした田畑が、あらはな肌を眼のごごく限り展べてゐて、霜枯の叢からは實をつけた雑草の莖が淋しげにすいすいと伸びてゐる。さうして人の心も己自身の肌寒い淋しさに驅られて、遠い地平線の邊へささまよひ行く。その地平線の彼方に、淡い夢のやうな憧憬の世界がある。

秋は寂しいといふのは眞實である。秋はあらゆる物の外皮を、凡

て複雑多様な外皮を自ら振り落さしめて、萬物を裸の儘で突立たしめる。斯かる落葉の剝脱の世界に、更に特殊の氣分を添へるものは、淡いながらに鋭い日の光である。やや南方に傾いた日脚と、北から來る冷かな微風とのために、その光は弱く淡くなりながらも、極度に澄切つた空と大氣とのために、非常に鋭く直接に射して來る。宛ら真空の中に於けるが如くに、何物にも遮られることのない其の光が、如何にくつきりした日向と影とを地面に投げて居るかを見る時、人は殊に深く秋を感じる。落葉の上の木立の影、田の畝の草葉の影、野の上の鳥の影、又、狭苦しい都會の中にあつては、苔蒸した庭の上の軒端の影、障子に映る樹木の影、其等のものが明るい日向とつきつぱり區劃せられてゐるのを見る時、人の心には言ひ知れぬをののきが傳はつて來る。このをののきこそ、秋が持つて居る本來の感じである。剝脱の靜澄な世界に、まざまざと現出せられる明暗

の區劃は、ぢかに人の心に迫つて來て、眞裸な心の中にも、くつきりとした光と影とが投げられる。さうして、人は知らず識らずに自分の心を凝視する。専念の中に這入つてゆく。純なもの、不純なもの、澄めるもの、濁れるもの、其等がつきつぱりと形を現して來る。

かかる凝視の眼は、必ず未來には向けられないで、ただ在るが儘の現在の姿、寧ろ過去を荷つて居る現在の姿にのみ向けられる。さうして、自然も人も、秋の世界全體が自分のあらはなる姿を見守る。専念のうちに沈黙する。

この専念の沈黙、それを堪へることが出來、それを眞に味感することが出來る者に、こつてのみ、秋は寂しくも侘しくもない。其處にはただ清淨な冥想がある。遠い地平線の彼方へ迄さまよひゆく魂が、その儘の憧憬を懷いて胸の中に戻つて來る。そして健かな清い感激が、あらゆる雜念を吹拂つて、自己の存在感、直に胎にこたへる

存在感を強調する。

かかる意味に於てのみ秋は讚美すべきである。

秋は凝視の季節、專念の季節、さうして自己の存在を味ふべき季節である。秋の眞の氣魄きぼくに觸れる時、誤つた生活は一溜りもなく其の影を消して了ふであらう。その代りに、正しい生活は益々力強く健かに根を張るであらう。春から夏にかけて色色な雑草に生茂られた吾々の心も、秋の氣魄に接して、只、根幹のみがまざまざと露出し、清淨な鏡に照し出されるのである。秋に自己を凝視して、しみじみとした歡喜を味ひ得る者こそ幸である。

秋には狭苦しい部屋から、若しくは蒸暑い工場から、戸外の大氣中に出でて、野や山に大いに遊ぶがよい。遊んで、更に地面の上に寝そべるがよい。大空の下、大地の上に、ほつりと投出された孤獨な自己を飽く迄も見守り、さうして味ふがよい。併し、その時、眞に秋を讚

美し得る者が果して幾人あるであらうか。(豊島與志雄の文に據る)

二 月夜の美觀上

今や秋も末となりて、蟲の聲も絶え絶えなり。人は三秋の月夜を如何に過しけむ。試に過去の情を緬想して、吾等と共に月夜の美觀を考ふる、亦可ならむか。

予の見る所によれば、月夜の美觀を成せる最も大なる要素凡そ三つあるが如し。一は月の光なり。二はこの光に照されたる夜の世界なり。三はこの月夜の光景が觀者の心に惹起す所の聯想なり。

月の光は青し。しかも其の青たるや、二つの點に於て普通に見る所の青に異なれり。第一の點はその力の弱きことなり。換言すれば、普通の青に較ぶれば、一分の暗を帶ぶることなり。第二の點は其の色いろの淡きことなり。換言すれば、稍白味を帶びておぼるげなること

なり。凡そ黒色若しくは黒色の表示する所は解くべからざる秘密なり。沈靜の至極、即ち寂滅死滅なり。今青に加ふるに一分の暗を以てす。これ青をして黒に一步近づかしむるなり。やがてそが表示する所の感情をして、更に一層の神祕と寂寞とを加へしむるなり。是に於てか、月夜の青はこれを普通の青に較ぶれば、そが表示せる沈黙・安靜・冥想に於て一段の深さを加ふ。若し夫れ色の淡きが如きは、其の色の白さを加へたるが故なり。白はあらゆる色相の不在を證するもの、そが表示する所は無體無相の極致にして、畢竟するに非實在の標號たり。今青にして一分の白を加ふと言ふ、これ非實在に向つて一步を轉じたるもの。換言すれば、實在の青に加ふるに一分の假象性を以てせるものと謂ふべし。かくの如く月光の青色は、一面に於ては其の暗きが爲に沈靜の情を深からしめ、他面に於てはその淡きによりて實在の性を淺からしむ。

されば、普通の青と月光の青とを較ぶれば、彼は實にして之は假なり。日中の青もまた沈靜・冥想の標號なりと雖も、それが表示する所の者は凡てなほ實在たるを失はず。故に天の青きを見るにも、海の青きを見るも、山野草木の青きを見るも、實在物として之を見るのみ。而して觀る者の身は、堂堂たる白日の中にあるを以て、周圍の狀況一として實在の意識を確むるものに非ざるはなし。然れども月夜の青はその淡きによりて既に假象的たり。而して其の暗きによりて沈靜の情を深うす。況や時は日中にあらずして、實在せる人生の休止時と見るべき夜間なるをや。

斯くの如く見る時は、月夜の美は、其の色によりて大半を説明せらるべきにあらずや。しかも斯かる微妙なる色彩が天地を裹みて一色たらしむるなり。山も、川も、草も、木も、田野も、市街も、人間も、天地間のあらゆる物は、この微妙なる色彩によりて一抹せられ、均しく

共同の色相を現するなり。月を觀る人、彼は夢みたるに非ず。されど、彼の見る所の薄暗き青白き世界は、實在のものご何等か異なれるものあるを感ぜざるべきか。さなきだに青は沈靜、冥想、悲哀の色なるを、彼の心はその暗く且つ淡きによりて一層の感を深うすること無かるべきか。寂寞たる夜間の光景と相待ちて、幽渺名づけ難き月夜の安慰と冥想と悲哀と、斯くの如くにして生ぜらるるに非ざるか。

月夜の美觀や幽渺言ひ難し。されど、一事の明かなるは、そが吾人に及ぼす感情の悲哀の一面に傾けることなり。而してその色相の誘起する感情は不定なるものなるを以て、この場合に於ても悲哀は不定の悲哀なり。ただ何となくうら悲しきなり。而して月光の青は、吾人の意慾と共にこの意慾の主體たる「我」をも没するを以て、その悲しみや、我執の悲しみに非ずして、ただ何となく悲しきなり。悲

しむ者の我なる事をも打忘れ、我は唯悲しき世界その物の一分身なるが如く覺ゆるなり。譬へば妙なる音樂に聞惚れたる人の樂しみ外にありて、我その中に在るが如く覺ゆると同じかるべし。

幽渺にして定かならざる月夜の感情は、之と類を同じうせる他の物象に伴なはるる事によりて、更に一層の痛切を増すべし。讀者は定めし月下に尺八の音を聞きし事あらむ。さらば此の樂器の特有とも言ふべき一種言ひ難き咏歎の韻律は、月夜のうら悲しき感情といみじくも妙なる調和あるを注意せし事あらむ。月夜野に出でて小川の涓涓として流るるを聞き、或は松濤鏘鏘として響けるを聞く折には、月夜の感情の一入痛切に感ぜらるるなり。畢竟此等のものは月の光の響とも謂ひつべし。

三 月夜の美觀 下

一月ノ光
二夜ノ世界

(一)
人はパンのみに
て生きるものに
非ず。(聖書)

月夜の美觀を構成する要素として、その暗くして淡き青色に次ぐべきものは夜の世界なるべし。

夜の世界は、意慾競争の休止を告ぐべき世界なり。人は一日の活動を現世に奉じたる後、茲に退いてその精神の安慰を求むるなり。勞れたる夕陽の西山に沈むは、人生日日の戦鬪に對する休戦の合圖なり。人は茲にその鋒を收め、その胄を脱いで、靜に平和の世界に憩はむとするなり。されば夜は活動の時にあらずして靜思の時なり。煩悶の時にあらずして安慰の時なり。人にはパンの外にも糧あるが如く、晝の外にも世界あり。人生の慰藉と幸福とは必ずしも名利の世界に限ると思ふなかれ。人は活動に生くるが如く、靜思にも生き、信仰に生くるが如く、咏歎にも生き、光明に生くるが如く、暗黒にも生き、現在に生くるが如く、過去にも未來にも生き、現實に生くるが如く、理想にも生き得べし。夜こそはこの人生の大なる半面を

沈思
優
悲
情緒

(二)
月見れば千々に
物こそ悲しけれ
わが身ひとつの
秋にはあらぬぞ
(古今集 大江千
里)

時間の上に現示せるものにあらずや。かかる夜に於て月の光を見るこそ嬉しけれ。さなきだに靜思に沈み、咏歎に傾ける人の、そが青白き夢の如き光に洗はれたる心地の如何に嬉しかるべきぞ。月の光は即ち夜の冥想の空しからざるを證するなり。六慾煩惱の巷の外にも、なほ人の求むべき安慰の存することを證するなり。

されど、月光の色と夜の世界との外に、聯想なる第三の要素あり。月夜の美觀は之によりて一層深く、かつ痛切に感ぜらるるなり。譬へば野も山も共に月の一色に塗抹せらるるが如く、我が心にも亦一種悲哀の調子の響きわたるを覺ゆるなり。もし人の心に快活と沈鬱との両面ありとすれば、沈鬱の一面はこの悲哀の響に共鳴して、優しき、悲しき、あはれ深き、その他これに類せる諸の情緒に開發の機會を與ふ。月見れば千々に物こそ悲しけれとは這般の心情を歌ひたるものなるべし。されど斯くして起されたる感情は、初の中

る思ヲ若三第テレストイ
三

こそ定かならざれ、そが開發するに隨ひて、終には一箇の具象的形
式を得ざれば已まざるべし。而してこの定かならざる感情に具象
的形式を與ふるものは即ち聯想なり。

聯想にもさまざまの種類あり。觀る人の性格、閱歷、境遇によりて
素より一樣ならざるべきも、何人の念頭にも浮ぶべきは、自然と人
生の對比なるべし。この世にはあるまじき月の光の清らなる、蒼
茫たる天空の心ゆくばかり麗しく且つ限なき山川の依稀として
無言の靜寂を保てる、平和のおもかげ、悠久のしるし、何れか現世と
の好對比に非ざるべき。始なく終なき自然の美しき大觀に面すれ
ば、人生の事業の如何にあはれにも、また見すばらしく見ゆべきぞ。
名利得失成敗生死あはれ葉末の露にも較ぶべき五十年の短生命
を擧げて、この煙火の巷に齷齪し悲喜することの、むしろ滑稽にも
見ゆべきなり。

自然と人生との對比に次いで最も著しき聯想は、過去の追憶も
しくは遠人の懷慕なるべし。

江畔何人初見月。江月何年初照人。

人生代代無窮已。江月年年望相似。

こは唐の張若虛が詩中の句なり。天地の悠久にして人生の須臾
なるを歎ぜるが中に、過去の追憶を交へて感慨のうたた永きを覺
ゆ。殊に李太白が有名なる「把酒問月」の詩の如きは最も痛切にこの
感慨を現せりと謂ふべし。

青天有月來幾時。我今停杯一問之。

人攀明月不可得。月光却與人相隨。

(中略)

今人不見古時月。今月曾經照古人。

古人今人若流水。共看明月皆如此。

支那唐代の詩人。

支那唐代の詩人。

唯願當歌對酒時。月光長照金樽裏。

我が眺むる月は昔の人にも眺められたる同一の月なりとの意識は音に過去世の觀念を實にして、同情の強さを増す力あるのみならず、月その物に對しても一種の親しき、他ならぬ感情を覺ゆべし。されば月を介して吾は直に古人の心情を感得するの思あるなり。國破れて山河あり。と雖も、然も天上の明月長へに渝らざるに較ぶれば、山河もなほ桑滄の變あるを免れじ。されば人生古今の盛衰を瞰下して、然も自らは一分の隆替を感ぜざる月が過去世の追憶に際して最も有力なる媒介者たるは、極めて自然の事なるべし。月によりて遠人を懷慕するの情も同一の起原を有すべし。

過去世の追憶、遠人の思慕、此等は月夜の聯想として、恐らくは何人も覺えあることならむ。この聯想は精神全體の沈鬱悲哀なる後景と相應じ、月夜の感慨に一層の深さを加ふるの力あり。諸の咏

(二) 國破山河在。城春草木深。(杜甫)

國破れり山河は依然としてありて城は春の草木深し。杜甫の詩に於ては、山河の變あるを免れず、然も天上の明月長へに渝らざるに較ぶれば、山河もなほ桑滄の變あるを免れじ。されば人生古今の盛衰を瞰下して、然も自らは一分の隆替を感ぜざる月が過去世の追憶に際して最も有力なる媒介者たるは、極めて自然の事なるべし。月によりて遠人を懷慕するの情も同一の起原を有すべし。

歎はこの聯想の絲をたどりて、一種の幽渺なる安慰を吾人に與ふるなるべし。(高山樗牛一文は人なり)

四 百蟲譜

蝶の花に飛びかひたる、やさしき物の限なるべし。それも啼く音を愛づるものならねば、籠に苦しむ身ならぬこそなほめでたけれ。さてこそ、^三莊周が夢もこの物には託しけめ。

蛙は古今の序に書かれてより、歌よみの部に思はれたるこそ幸なれ。臙月夜の風しづまりて、遠く聞ゆるはよし。古池に飛んで翁の目覺したれば、このもの事、更にも謗り難し。

蟬はただ五月晴に聞きそめたる程がよきなり。やや日ざかりに啼きさかる頃は、人の汗しぼる心地す。されば初蝶も、初蛙もいふ事をきかず。この者ばかり初蟬と言はるこそ大いなる手柄な

(二) 昔者莊周夢爲胡蝶、栩栩然胡蝶也。俄然覺則蘧然周也。不知周之夢爲胡蝶歟、胡蝶之夢爲周歟。(莊子) (三) 花になく鶯、水にすむ蛙の聲なきけば、生きとし生けるものいづれか歌をよまざりける。(古今集序) (四) 松尾芭蕉。

やがて死ぬけしきは見えす蟬の聲(松尾芭蕉)

鼓子花やさちらの露もまにあはす也有



蹟筆有也井横

胤恭勤不倦博學多通家貧不常得油夏月則練糞盛數十盞火以照書以夜繼日焉(晉書車胤傳)

螢は比ふべきものもなく景物の最上なるべし水に飛びかひ草にすだく五月の闇は只このものの爲にやとまでぞ覺ゆる然るに貧の學者にさられて油火の代りにせられたるはこの者の本意にはあらざるべし歌に螢火と詠ませざるは殊の外の不自由なり俳諧には此の眞似すべからず
茅蝸は多きもやかましからず暑さは晝の梢に過ぎて夕は草に露おく頃ならむつくつくぼうしといふ蟬は筑紫戀しともいふな

楚國襲舍(漢哀帝の時の人)初隨楚王朝宿未央宮見蜘蛛大如栗四面築羅網有蟲觸之而死舍乃歎曰吾生亦如此耳仕官者人之羅網也豈可淹歲於是挂冠而退時人謂之爲蜘蛛之隱(金樓子)

り筑紫の人の旅に死して此のものになりたりと世の諺にいへりけりあはれは蜀魂の雲に叫ぶにも劣るべからず
蜘蛛はたくみに網を結んでひそまつて物を害せむとすもるこの昔には退隱の媒ともなりたれどひとへに奸賊の心ありていこにくし古代朝敵の初として頼光をさへおびやかしたるいと恐しさはいへ廢宅の荒れたる軒の蟬の羽なごかけ捨てたるはいささかあはれ添ふる折もあらむか彼はかひがひしく巢作りてこそあれ東海道に散りぼひたる宿なし者をばくもとはいかでいふやらむ
蠶の生涯は世の爲に終り火取蟲はたがために身をこがすや蟬ははかなきためしにひかれ蓼くふ蟲は不物ずきの謗となれりおなじ寶の名によばれて玉蟲はやさしく黄金蟲はいやし
蟻は明暮にいそがしく世の營に隙なき人には似たり東西に聚

淳于棼、醉夢入大槐安國、見王。王曰、吾南柯郡、屈廬爲守、居凡廿載、使者送出、穴、遂寤、導古槐下蟻穴、洞然明、期乃槐安國。又一穴直上南枝、卽南柯郡也。(異聞集)

千丈之隄、以蟻蟻之穴潰。(韓非子)

憎者蠅賦あり。憐紙魚詞あり。

欲以蟪蛄之斧禦隆車之隧(文選)

駿河國駿東郡。同國富士郡。

散し餌を求めて止まず、いつか槐安の都をのがれて、その身の安き事を得む。さるもたより悪しき方に穴を營みて、千丈の隄を崩すべからず。

蠅は歐陽氏に憎まれ、紙魚は長嘯子にあはれまる。狗の齒に噛まるる蚤はたまたまにして、猿の手にさぐらるる虱は逃るること難かるべし。

蝸牛はただ水にあるべきものの、いかで草葉に遊ぶらむ。家もちたれども、行くさきざきをおひ歩くは、雲水の安きにも似ず。蛇、蚯蚓の足なくとも、あゆむべくば、蜈蚣をさむしの數多きは不用のことなり。

蟪蛄の瘦せたるも、斧を持ちたる誇より、その心いかつなり。人の上にも此のたぐひはあるべし。

蟹のあゆみに譬ふべきものこそなけれ。ただ原吉原を駕籠にの

りて富士を眺めゆく人には似たり。

促織、鈴蟲、戀蟲はその音の似たるを以て名によばる。松蟲のその木にも寄らで、いかで斯く名を付けたるならむ。毛生ひ、むくつけき蟲にも同じ名ありて、松を枯し、人にうとまる。一つ在處に二人の八兵衛ありて、一人は後生を願ひ、一人は殺生を事とす。これ松蟲のたぐひなるべし。

きりぎりすのつづりさせとは、人の爲に夜寒を教へ、藻に棲む蟲は、われからとただ身の上を歎くらむを、蓑蟲のちちよと呼ぶは、母をば慕はで、なご父をのみ戀ふらむとあやし。

蚊は憎むべき限ながら、さすが卯月の頃、端居めづらしき夕、はじめてほのかに聞きたらむ、又は長月の頃、力なく残りたるは、寂しきかたもあり。蚊帳釣りたる家のさま、蚊遣焚く里の烟など、かつは風雅の道具ともなれり。藪蚊は殊にはげしきを、かの七賢の夜咄には、

秋風にはころびわらし藤袴つづりさせてふきりぎりすなく(古今集、在原棟梁) あまの刈る藻にすむ蟲のわれからと音をこそなめ世をば恨みじ(古今集、藤原直子) 蟪蛄……八月ばかりになれば、父よ父よとはかなげに啼く、いみじくあはれなり。(枕草子) 晉岱康、字叔夜、有奇才。長好老莊、所與交者唯阮籍、山濤、預其流者、向秀、劉伶、阮咸、王戎爲竹林之遊。世所謂竹林七賢也。(蒙求)

いかに團扇の隙なかりけむ。(横井也有一鶴衣)

五 述 懷

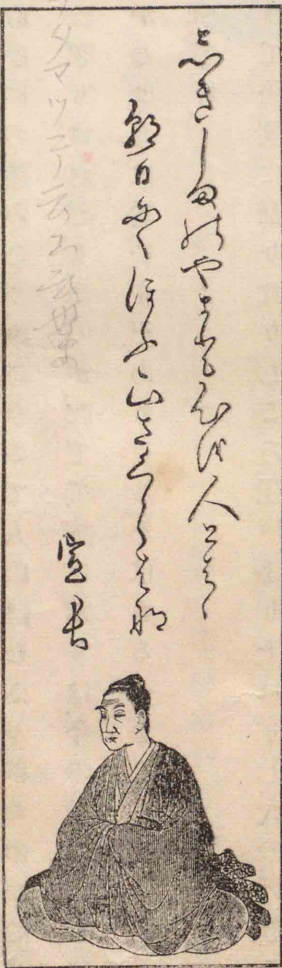
おのれいときなかりしほごより、書を読む事をなむよるづより
 もおもしろく思ひて讀みける。さるは、はかばかしく師につきて、わ
 ざと學問すこにもあらず、何ぞ心ざす事もなく、そのすぢに定めた
 るかたもなく、只からの、やまとの、くさぐさのふみ、あるにまか
 せ得るにまかせて、古き、近きをもいはず、何くれこよみけるほごに、
 十七八なりしほごより、歌詠ままほしく思ふ心いできて、詠みはじ
 めけるを、それはた師にしたがひてまなべるにもあらず、人に見す
 る事などもせず、只一人よみ出づるばかりなりき。集ごもも古き、近
 き、これかれと見て、かたのごとく今の世の詠みざまなりき。
 かくて、はたちあまりなりしほご、學問しにきて、京になむのぼり

(一) 小津定利。
 (二) 日本橋大傳馬町
 二丁目にありき。
 (三) 名はお勝。

しきしまのや
 まと心を人こ
 はは朝日にに
 ほふ山さくら
 はな 宣長

(四) 釋契沖の著、五
 卷より成る。

ける。さるは十一のとし、父におくれしにあはせて、江戸にありし家
 のなりはひをさへ失ひたりしほごにて、母なりし人のおもむけに
 て、くすしのわざをならひ、又そのために、世のつねの儒學をもせむ
 ごとなりけり。



宣長居本と其の筆蹟

さて京に在りしほごに、百人一首の改觀抄を人に借りて見て、は
 じめて契沖といひし人の説を知り、そのよにすぐれたるほごをも
 しりて、此の人のあらはしたるもの、餘材抄勢語臆斷などを始め、そ
 の外もつぎつぎにもとめ出でて見けるほごに、すべて歌まなびの

すぢの善き悪しきけぢめをもやうやうにわきまへさこりつさる
 ままに、今の世の歌よみの思へるむねは、大かた心になはず、その
 歌のさまもをかしからずおぼえけれど、**その**かみ**同じ**心なる友は
 なかりければ、ただ世の人なみに、ここかしこの會などにも出でま
 じらひつつ詠みありきけり。さて人の詠むふりはおのが心にはか
 なはざりけれども、おのがたてて詠むふりは、今の世のふりにもそ
 むかねば、人は咎めずぞありける。そはさるべきことわりあり、別に
 言ひてむ。

さて後國に歸りたりしころ、江戸より上れりし人の、近きころ出
 でたりとて、冠辭考といふものを見せたるにぞ、縣居の大人の御名
 をも始めて知りける。かくて其のふみはじめに一わたり見しには、
 更に思ひもかけぬ事のみにして、あまりことほくあやしきやう
 におぼえて、さらに信ずる心はあらざりしかど、猶あるやうあるべ

(一)
 賀茂真淵の著、
 十卷より成る。
 (二)
 賀茂真淵。

しと思ひて、立ちかへり今一たび見れば、まれまれには、げにさもや
 ごとおぼゆるふしぶしも出できければ、また立ちかへり見るに、愈げ
 にとおぼゆること多くなりて、見るたびに信ずる心の出で來つつ、
 遂にいにしへぶりのころことばのまことに然る事をさこりぬ。
 かくて後に思ひくらぶれば、かの契沖が萬葉のときごとはなほ未
 だしき事のみぞ多かりける。おのが歌まなびのありしやう、大かた
 かくの如くなりき。

さて又道の學びは、まづはじめより、神書といふすぢの物古き近
 き、これやかれやと讀みつるを、はたちばかりの程より、わきて心ざ
 しありしかど、こりたててわざとまなぶ事はなかりしに、京にのぼ
 りては、わざこも學ばむとこころざしはすすみぬるを、かの契沖が
 歌ぶみの説になすらへて、皇國の古の意をおもふに、世に神道者こ
 いふものの説くおもむきは、みないたくたがへりこ、早くさこりぬ

* 田安宗武。

れば師と頼むべき人もなかりしほどに、われいかで古のまことの
むねをかむかへ出でむと思ふところざし深かりしにあはせて、か
の冠辭考を得て、かへすがへすよみあぢはふ程に、いよいよ心ざし
深くなりつつ、此の大人を慕ふ心、日にそへてせちなりしに、一年こ
の大人、田安の殿の仰せごをうけたまはり給ひて、此の伊勢の國
より、大和山城など、ここかしこと尋ねめぐられし事のありしをり、
この松阪の里にも二日三日ごまり給へりしを、さる事つゆしら
で後に聞きていみじく口惜しかりしを、かへるさまにも、また一夜
やごり給へるを、うかがひ待ちて、いとうれしく、急ぎやごりに
まうでて、始めて見え奉りたりき。さて遂に名簿を奉りて、教を承る
ことにはなりたりきかし。(本居宣長)

六 小品四章

一、夜學

寺寺の初夜の鐘のひびきもをさまりて、皆人も寝たるにいと嬉
しう、燈火あかくしなして、文机に打向ひたる、いみじう心すみて、晝
見たりしあたりの、何ごころなくて過ぎにしも思ひしられて、深き
心ばへあるくだりくだり。おのづから解き得らるかし。かかげつ
くしてもなほねぶたさも知らず、油さし添へつつ見もてゆくに、遠
き世の人もたださしむかひ語らふ心地す。さうしつくりて、をかし
きふしぶし、あるはふと思ひ得たることなどをば、墨おしすりつつ
書きつけなごするもをかし。雞の聲は夜深きにやと思ふに、いごと
く明けはなれたる、しばしとて打ちねぶる夢のうちもあだしごと
ならむやは。(中島廣足)

二、蟲の音

家なみしきたる都のすまひは前裁もほごなけれど、萩すすきな

京都の西北郊。

ごはさすがにをりしりがほなるを、あはれと見わたるゆふつかたに、親しき人のもごより、昨日嵯峨野にもごめしなりとて、蟲ごもあまた籠に入れておこせたり。めづらかにて、とくわらは呼びて放たせつつ、なほながめをるに、もとよりのにやあらむ、いままゐりのにやあらむ、かつがつ啼きいでたる、いと興あり。月さしのぼりては、まして音も澄みゆくには、はるけき野べまで想ひやられて。(石川依平)

三、わざと法

よろづの何のわざにも、古よりのりとなすしるべありて、それによらざらむは、まことの心を得がたく、その法を得たるは、まめやかなりとて人もうべなふめり。こはもごよりことわりさる事ながら、深く事のもごを考ふるに、よろづの事はじめに法を設けおきて、後にそのわざを爲しいづるにはあらず。そのわざあるがうへにこそ法てふことはいで來めれ。かかれれば、わざは本にて、のりは末なり。か

管仲と鮑叔。支那周代の人に於て、極めて善く交りたること列子に見ゆ。

れ何のわざにもよく心を深めて、その道に入りたらむ人は、われより法をば始めつべし。すべてくだりたる世人の心ぐせにて、のりになづみ、あとにかかづらひて、かへりてあらぬ方にひがみもて行くたぐひも多かるをや。もろこしの人の詞に、法はのりなきがうちにありといへるは、その詞あぢはひありとこそ覺ゆなれ。さはいへど、これは世のつねのなほほしききは人のためには、たやすくいひがたくやあらむ。(村田春海)

四、交友の道

「友に交る道は、いかなることか心得べき。」といふに、友はその所長を友となすべし。古きこと好むにはそのことに友とし、武技好むにはそれに友とし、歌詠むものにはその道に友とするぞよき。さるに歌もて、このふりは悪しかり、かれにまねび給ふは、辭事なりなど言ふにも及ばじ。ただ交りてこそあるべけれ。古にいふ管鮑の交と

いへども、この二人同じ徳、同じ心なりしにもあらかし、世の中に、同じ心の人といふものは、いと稀なることなるべし。ただわが好めるかたに引入れむとするもうるさし。この人、この所は長じぬれど、そこはいと短し。その短き所を、引伸べむとするはいと苦し。さ思ふわれも亦その短き所あるものを、殊に思ふこと皆諫めものせむとするを、かの信と思ふは違へりけり。交るが中にも知己の人はいと稀なるものなり。それらよく言葉を求めなば、もとより言ふべし。されど、しばしばすべきにはあらずかし。淺き契の友なりとても、友といふ中ならば、その人のうへの存亡にかかはるばかりの事ならば、言ふべし。すべて強ひてかくせむ、かく救ひてむと、まげてもと思ふは皆中道には背けりと言はむ。ただその所長を友とすれば、交り難き人もなく、われに益なき友もあらず。かの友によりてわが方の亂れむとするは、皆その短を友とする故なり。と答へしものありきと

や。(白河樂翁)

七友道

友道に最も忌むものは猜忌なり、嫉妬なり。蓋し友は多くは自己と主義、理想、好尚、信仰を同じうするもの、而してその知識、才能に於ても甚しき懸隔なきを常とす。げに友は第二の我なり。随つて、起り易きものは嫉妬なり。而も一たび嫉妬の情生ぜんか、最早貴き友情を味ふ資格なきものと墮せるなり。

我を最もよく知るものは友なり。我等は一切の自家秘密を打明け得るものを得て、始めて解脱し、超我す。人は知音の爲には身命をも獻げて辭せざらむとするもの、而して此の如き知音は友あるのみ。管仲、鮑叔の例以て徴すべし。故に自己の弱點、秘密を打明け得ざるものは、眞友を得る能はず。眞我を打出し、肺腑を披瀝して、相照す

ものにあらざれば、友ある能はず。友を得る第一要件は、公明に我を打明くる勇氣なり。自ら缺陷、弱處を掩ひ包み、恰も栗のいがの如く、ひしと護身の劍戟に身纏ひして、さて友と交るものあり。此の如くして友を得むこと遂に能ふべからず。

自家の短處を暴露するは友に交る一要件なりと雖も、こは他の最大要件と相須ちての自然の結果たるを要す。眞善美の理想に向せむとする熱情に相合し、此の美しき意氣に相許して、自他提擲して勇猛精進する一事これなり。この理想的結合ありて、始めて互にその弱點、短處を打明け合うて、相同情し、相切磋して進むを得べく、その醜處、暗處は理想の光もて和げられ、言ひ難き向上の歎の涙もて溫めらる。かかる友道に於ては、自他その短處、弱點を知ることが却て同情、發憤の動力となるなり。

今の世には、何ぞ熱情をもて友を求むるものの少き。世は濇漓、輕

(二) 二人同心、其利斷金、同心之言、其臭如蘭(易、繫辭上傳)

(二) Mill (1806—1873) 英國の哲學者。

佻の流に漂ひて、かかる美しき熱情をも失へるか。嗚呼、友は人生最高の無價寶なり。花の前月の下の假初に結べる友垣だに嬉しさもトモのなるを金蘭の契の如何ばかり貴きぞ。人は子孫に生き、又は事業に生くといふ。されど、眞に生くるは友のみ。眞の我は唯友の中ニありて生き、榮え、光輝を放つ。

嘗て我が友に、病を得て瞑せむとするに臨み、我が志を成すものは君なり。我は君によりて生くべし。君それ自愛せよ。との一語を遺して逝きしものあり。今は憶ひ出づるだに切切の情に堪へず。友の眞意義を教へたるもの實に此の一語なりと。我は常に思ふなり。道の友、理想の友のみ眞友なり。されば、ミルが善人を外にして眞心より自由を愛するものなし。と言ひし如く、吾人は善人を外にして眞心より友を愛するものなし。と言はむとす。悪人は眞の我即ち理想を有せず。隨つて眞の友あることなし。自家心中に道を有するもの、

眞善美の理想を有するものにして、始めてよく友道の大義を盡すべし。同じ理想の佛前に跪禮する者にして、同氣同聲、相呼應感孚するを得べきなり。されば嗜好職業地位階級を同じうし、又は利益快樂を同じうするのみにては、友道は決して成るべきにあらず。友道は倫理・道德を根柢とす。友を得る道、豈に容易ならむや。

(網島梁川一我觀錄)

八 古調新調

○ 元朝や神代のこともおもはるる
○ 笠を着ば雨にも出でよ夜半の月

守 武
宗 鑑

徳の徳
徳の徳
徳の徳
徳の徳

○ 貞門の祖。(三三三)
○ 談林の祖。(三三三)
○ 伊丹派。(三三三)
○ 蕉風の祖。(三三三)

冬籠り蟲けらまでもあなかしこ

貞 徳

○ お静に御座れ夕陽いまだ残んの雪

宗 因

○ 青麥や雲雀があがるあれさがる

鬼 貫

○ 雲雀より上にやすらふ峠かな

芭 蕉

○ 五月雨をあつめて早し最上川

ふる池や蛙飛
こむ水の音
はせを

ふる池や蛙飛
こむ水の音
はせを

ふる池や蛙飛
こむ水の音
はせを

ふる池や蛙飛
こむ水の音
はせを

芭蕉筆蹟

○ 荒海や佐渡に横たふ天の川

以下八句は元祿の蕉風調。

明月や池をめぐりて夜もすがら

物言へば唇寒し秋の風

金屏の松のふるびや冬ごもり

名月や疊の上に松の影

黄菊白菊その外の名はなくもがな

岩端やここにもひとり月の客

牛叱る聲に鳴たつゆふべかな

長松が親の名で来る御慶かな

其角

嵐雪

去來

支考

野坡

鶯や下駄の齒につく小田の土

凡兆

卯の花に蘆毛の駒の夜明かな

許六

歛さげて叱りに出るや桃の花

涼倍

春の海ひねもすのたりのたりかな

蕪村

いかにしの装
やあらしの花
ころも 蕪村

時鳥平安城をすぢかひに

蕪村筆蹟

(二) 以下七句は天明前後の調。

明月や夜は人住まぬ峯の茶屋
三徑の十歩に盡きて蓼の花
化けさうな傘かす寺の時雨かな

山路來て向ふ城下や風の数

馬借りてかはるがはるに霞みけり

曉や鯨の吼ゆる霜の海

霧深し何呼ばりあふ岡と舟

美しや春は白魚かいわり菜

太 祇

蓼 太

曉 臺

几 董

白 雄

枯葦の日に日に折れて流れけり

關 更

秋來ぬと目にさや豆のふこりかな

大 江 丸

足輕のかたまつて行く寒さかな

士 朗

東海道残らず梅となりけり

成 美

名月や江戸のやつらが何知つて

一 茶

大螢ゆらりゆらりと通りけり

九 詩 境

秋來ぬと目には
さやかに見えぬ
さし風の音にぞ
驚かれぬる(古
今集、藤原敏行)
(二二)
以下文化文政前
後の調。

十五夜、立派、月

山路に登りながら斯う考へた。
 智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈
 だ。とかくに人の世は住みにくい。住みにくさが高じると、氣樂な所
 へ引越したくなる。何處へ引越しても住みにくい。と悟つた時、詩が
 生れ、畫が出来た。

引越す事のならぬ世が住みにくければ住みにくい處をどれ程
 か寛げて、束の間の命を束の間でも住みよくせねばならぬ。ここに
 詩人といふ天職が出来、ここに畫家といふ使命が降る。あらゆる藝
 術の士は人の世を長閑にし、人の心を豊かにするが故に尊い。
 住みにくい世から住みにくい煩を引抜いて、有り難い世界を目
 のあたりに寫すのが詩である。畫である。或は音樂彫刻である。細か
 にいへば、寫さないでもよい。ただ目のあたりに見れば、そこに詩も
 生き、歌も湧く。着想を紙に落さずとも、珍珠の音は胸裏に起る。丹青

智に働けば角が立つ。

藝術といふ天職が出来、ここに畫家といふ使命が降る。

* Camera.

を畫架に向つて塗抹せずとも、五彩の絢爛は自ら心眼に映る。ただ
 己が住む世をかく觀じ得て、靈臺方寸のカメラに、澆季溷濁の俗界
 を清く麗かに收め得れば足る。此の故に無聲の詩人には一句なく、
 無色の畫家には尺練なくとも、かく人世を觀じ得るの點に於て、か
 く煩悩を解脱し得るの點に於て、かく清淨界に出入し得るの點に
 於て、又此の不同不二の乾坤を建立し得るの點に於て、我利私慾の
 羈絆を掃蕩し得るの點に於て、あらゆる俗界の寵兒よりも幸福で
 ある。

世に住むこと二十年にして、住むに甲斐ある世と知つた。二十五
 年にして、明暗は表裏の如く日の當る所にはきつと影がさす。と悟
 つた。三十の今日はいかう思つてゐる。喜の深い時憂深く、樂しみの大
 いなる程苦しきも大きい。之を切離さうとする。と身が持てぬ。片付
 けようとするれば世が立たぬ。

Handwritten mathematical notes and scribbles at the top of the left page, including $a = \frac{a+c}{2}$ and other algebraic expressions.

余の考がここまで漂流して来た時、余の右足は突然坐りの悪い角石の端を踏損つた。平衡を保つために、すは^{すは}と前に出した左足が仕損じの埋合せをすると共に、余の腰は具合よく方三尺程な岩の上に下りた肩に掛けた繪の具箱が腋の下から躍り出しただけで、幸い何の事もなかつた。

立上る時に向うを見ると、路から左の方にバケツを伏せたやうな峯が聳えてゐる。杉か檜か分らないが、根元から頂まで悉く蒼黒い中に、山櫻が薄赤く、だんだんに棚引いて、接目がしかと見えぬくらゐ霧が濃い。少し手前に禿山が一つ羣を擡んで、肩に逼る。禿げた側面は、耳人の斧で削り去つたか、鋭い平面をやけに谷の底に埋めてゐる。天邊に一本見えるのは赤松だらう。枝の間の空さへはつきりしてゐる。行く手は二町程で切れてゐるが、高い處から赤い毛布が動いて來るのを見ると、登れば彼處へ出るのだらう。路は頗る

難儀だ。固より急ぐ旅でないから、ぶらぶらと七曲りへかかる。

忽ち足の下で雲雀の聲がし出した。谷を見おろしたが、何處で啼いてゐるか、影も形も見えぬ。只聲だけが明かに聞える。せつせと忙しく絶間なく啼いてゐる。方幾里の空氣が一面に蚤に刺されて、おたたまれないやうな氣がする。あの鳥の啼く聲には、瞬時の餘裕もない。長閑な春の日を啼きつくし、啼きあかし、又啼きくらさなければ、氣が濟まぬと見える。其の上、何處までも登つて行く、何時までも登つて行く。雲雀はきつと雲の中で死ぬに相違ない。登り詰めた揚句は流れて雲に入つて漂うてゐる内に、形は消えてなくなつて、只聲だけが空の裏に残るのかも知れない。

巖角は鋭く廻つて、按摩なら眞逆様に落ちるところを、際ごく右に切れて、横に見おろすと、菜の花が一面に見える。雲雀は彼處へ落ちるのかと思つた。いいや、あの黄金の原から飛上つて來るのかと

思つた。次には落ちる雲雀と上る雲雀とが十文字にすれ違ふのかと思つた。最後に落ちる時も上る時も、また十文字にすれ違ふ時も、元氣よく啼續けるだらうと思つた。

春は眠くなる。猫は鼠を捕る事を忘れ、人間は借金のある事を忘れる。時には自分の魂の居處さへ忘れて正體なくなる。只菜の花を遠く望んだ時に眼が覺める。雲雀の聲を聞いた時に魂の在處がはつきりする。雲雀の啼くのは口で啼くのではない。魂全體で啼くのだ。魂の活動が聲に現れたものの内で、あれほど元氣のあるものはない。ああ愉快だ。斯う思つて斯う愉快になるのが詩である。

忽ちシエレーの雲雀の詩を思ひ出して、口の内くちのうちにで覺えた所だけ誦して見たが、覺えてゐる所は二三句しかなかつた。其の二三句の中にこんなものがある。

前まへを見ては、後うしろを見ては、物欲しと憧るるかなわれ。

* Shelley.
(1792—1822)

英國の詩人。

腹からの笑といへど、苦しみの底にあるべし。

美しき極みの歌に、悲しさの極みの想籠ることを知る。

成程、幾ら詩人が幸福でも、あの雲雀のやうに思ひ切つて、一心不亂に前後を忘却して、我が喜を歌ふわけには行くまい。西洋の詩は無論の事、支那の詩にも、よく萬斛の愁なごといふ語がある。詩人だから萬斛で、素人なら一合で済むかも知れぬ。して見ると、詩人は常の人よりも苦勞性で、凡骨の倍以上に神經が鋭敏なのかも知れぬ。超俗の喜もあらうが、無量の悲しみも多からう。そんなら詩人になるのも考へ物だ。

暫くは路が平らで、右は雜木山、左は菜の花の見續けである。足の下に時々、蒲公英を踏みつける。鋸のやうな葉が遠慮なく四方へ伸して、眞中に黄色な珠を擁護して居る。菜の花に氣を取られて、踏みつけた後で、氣の毒な事をしたと振向いて見ると、黄色な珠は依然

信以止る

として鋸の中に鎮座してゐる。暢氣なものだ。又考を續ける。

詩人に憂は付きものかも知れないが、あの雲雀を聞く心持になれば微塵の苦も無い。菜の花を見ても只嬉しくて胸が躍るばかりだ。蒲公英も其の通り、櫻も——櫻は何時か見えなくなつた。斯う山の中へ来て自然の景物に接すれば、見る物も聞く物も面白い。面白いだけで別段の苦しみも起らぬ。起るとすれば、足が草臥れて、旨い物が食べられぬ位の事だらう。

併し苦しみのないのは何故だらう。只この景色を一幅の畫として觀、一卷の詩として讀むからである。畫であり詩である以上は、地面を貰つて開拓する氣にもならねば、鐵道を敷いて一儲する料簡も起らぬ。ただ此の景色が、腹の足しにもならず、月給の補ひにもならぬ。此の景色が、景色としてのみ余が心を樂しませるから、苦勞も心配も伴なはぬのだらう。自然の力は是に於て尊い。吾人の性

情を瞬刻に陶冶して、醉乎として醉なる詩境に入らしむるのは自然である。(夏目漱石「草枕」)

一〇 靈 感 上

人は常に我が胸中の祕密を語らむとす。或は語らむと欲してこれを語る者あり、或は語る事なからむと欲して語る者あり。有心無心の差別はあれども、胸中の祕密は決して長く胸中に隠伏するものにはあらず。口に顯れざれば舉動に顯れ、舉動に顯れざれば容貌に顯る。

蓋し人の有する四肢五官は、總てこれ心中の祕密を顯す廣告者なり。吹聴者なり。如何に口に嬉しと言ふことも、額に皺の寄る、我その憂あるを知る。如何に無頓着なる風をなすとも、頬に笑鬨の立つ、我その樂しみあるを知る。或は溜息となり、或は苦笑となり、或は赤面

* Inspiration.

(一) 平安朝の畫家。
 (二) 支那の南宋の畫僧。(二五〇年代)
 (三) Michelangelo. (1475—1564) 伊太利の彫刻家・畫家。
 (四) Saint Peter. 羅馬の寺院。
 (五) Milton. (1608—1674) 英國の詩人。
 (六) 字は子美、唐の詩人。
 (七) 元朝初期の小説家。

し、或は青筋を立つ、これ豈に爲にする事ありてなきむや。その心中の祕密は、自ら抑へむと欲して抑ふる能はず、直に此等の機關を透して自ら顯れ出づるのみ。思を陳ぶる、何ぞ必ずしも三寸の舌のみならむや。情を絞づる、何ぞ唯一枝の筆のみならむや。總て眼に閃き、顔に映じ、手に動き、體に發するもの、皆これ我が深微なる幽懷を述ぶる一の文章と謂はざるべからず。

音に是のみならず、繪畫・彫刻・建築・音樂・詩歌・文章・宗教の如き、皆是人心の反應たるに過ぎず。例せば巨勢金岡の「風雷神の圖」に於ける、牧谿が「洞庭秋月の圖」に於ける、ミケランジェロが「セントペテル寺の壁畫」に於ける、豈に必ずしも己が胸中を白狀せむが爲に之を畫きたるものならむや。然れども彼等が筆を執り、刷毛を揮ひ、繪具を揮ひ、紙若しくは布に接するに當り、己が胸中に有るもの、直に自家の胸臆を掛してこの畫中に映出せしなり。風雷神の英姿颯爽たる、

(一三) Hamilton. (1738—1856) 英國の哲學者。
 (一四) Pyramid. 露國の古都。
 (一五) Moscow. 露國の古都。
 (一六) Wagner. (1813—1883) 獨逸の樂曲作家。
 (一七) Beethoven. (1770—1827) 獨逸の作曲家。
 (一八) Victor Hugo. (1802—1885) 佛國の詩人。

洞庭秋月の神韻縹渺たる、セントペテル寺の壁畫の莊嚴雄麗なる、これ先づ彼等の胸中に風雷神あり、洞庭あり、上帝あり、而して心に充ち、手に溢れて、遂に此の如き絶妙の畫圖を生ずるに至りしなり。豈に唯これのみならむや、ミルトンの「失樂園」に於ける、杜甫の「蜀中の詩」に於ける、施耐庵が「水滸傳」に於ける、ユーゴーが「噫無情」に於ける、ベートーフェン・ワグネルが音樂に於ける、或は奈良の大佛の如き、或はモスコイの大鐘の如き、或は埃及のピラミッドの如き、或は萬里の長城の如き、その事物の偉大絶倫なるにも拘らず、總てこれ人の胸中より生じたる幻影に過ぎざるなり。人ただ其の現象の偉大絶倫なるに驚歎して、却てこの現象を生じたる人の心の更に偉大絶倫なるを知らず。蓋し偉大なる事物は偉大なる心より生じ、美妙なる現象は美妙なる心より生ず。

ハミルトン曰く、世界に於て人より大いなるものは無く、人に於

て心より大いなるものは無し。吾人實にその然るを信ず。而してこの心にして、突如として我自ら我たるを忘れ、我自ら我より超越するに至るこゝあり。これを「靈感」と云ふ。靈感とは即ち人の思想感情の高潮にして、凡そ世の英雄・豪傑・孝子・烈婦・忠臣・義士・熱心なる宗教家・美術家・冒険者の如き人人が、人を驚かし、世界を驚かすの事業を爲すや、必ずこの靈感の爲に鼓動せられたる數分時にあらざるはなし。唯この數分時の行爲は、器械的に働きたる幾年月の行爲に勝るは吾人が常に信ずる所なり。史記の李將軍列傳に曰く、

廣出獵見草中石以爲虎射之中石沒鏃視之石也因復更射之終不能復入石矣。

蓋し石に中りて鏃を没するは、李將軍が平生の伎倆にあらざる。乃ちこの電光一揮、羽箭空を飛ぶの間こそ、以て靈感の働を察すべきなれ。

一一 靈感下

靈感の大いなる力は、殊に品性の上に顯る。世の平凡なる歴史家若しくは傳記家の如きは、往往、英雄人を籠絡す。と言ひ、而してその籠絡は斯くの如き手段、斯くの如き工夫にて爲せりとて、さも誇り氣に述べたつ。然れども試に彼等に問ふ可し。若し斯くの如き術にて出來得べきことならば、一たびその術を傳習するに於ては、恰も大工の術を學べば大工となるが如く、鍛冶屋の術を學べば鍛冶屋となるが如く、籠絡の術を學べば英雄となること容易なるべきか。殊に夫子自らは斯く英雄の祕術をさへ託き出したる人なれば、自らこれを行ひて英雄たるは容易なるべき筈なるに、彼等は英雄の伎倆を見抜き、その伎倆の存する所を解剖しながら、自ら英雄の事を行ひ、英雄たる能はざるは何ぞや、知るべし。英雄人を籠絡すと言

- (一) 清の學者、政事家。
- (二) 字は元徳、蜀主。
- (三) 諸葛孔明。
- (四) 字は仲謀、吳主。
- (五) 字は孟徳、魏主。
- (六) Caesar (B.C.100—44) 羅馬の政事家。
- (七) Cromwell (1599—1658) 英國の政事家。
- (八) Gladstone (1806—1898) 英國の政事家。
- (九) 韓退之。

ふが如きは、決して智術に依るに非ず、即ち言ふに言はれぬ靈感のありて、その人に接するや、電氣の物に觸るるが如く、磁氣の物を吸ふが如く、離れむとするも離るる能はざらしむることを、趙翼嘗て二十二史劄記に於て劉備を論じて曰く、
 至託孤於亮曰、嗣子可輔、輔之不可輔、則君自取之。千載之下、猶見其肝膈本懷。豈非真性情之流露。
 と、豈に獨り劉備のみならむや、孫權と雖も、曹操と雖も、若しくはケ一ザルと雖も、クロムウエルと雖も、グラッドストーンと雖も、皆然らざるは無し。これを要するに、かの傍人が英雄の行爲に就きて、種種器械的の評論を試むるは、恰も劣等なる批評家が文章軌範の評釋を爲すが如し。漫に自家の胸臆を以て彼此の批評を爲し、恰も韓柳の諸名家は定規を以て文章を作りたるかの如く、雙關法と云ひ、抑揚頓挫の法と云ひ、波瀾擒縱の法と云ふ。焉んぞ知らむ、皆これ後人の牽強附會に過ぎざるを、彼等、豈に初より斯くの如き法に據りて文を作らむや、即ち蘇轍が、

豈嘗執筆學爲如此之文哉。其氣充乎其中而溢乎其貌、動乎其言而見乎其文、而不自知也。
 といへる類なるのみ。靈感の繪畫に顯るるごきには、繪畫我を顯すに非ず、我即ち繪畫に顯るるなり。文章に於ても亦然り。我の思想を寫し出すに非ず、我即ち文章に顯るるなり。我が生命即ち文章に顯るるなり。例せば伊蘇普の譬喩の如く、或は獅子となり、或は狐となり、或は狼となり、或は鼠となり、その顯るる所は千變萬化すと雖も、要するに一の圓滿・美妙なる伊蘇普の智慧自らがこの間に發揮するのみ。吾人はこれを讀んで、その狼たるご狐たるとを見ず、唯一の伊蘇普たるを見るのみ。

蓋し靈感は神力なり。哲理的に、數理的に、科學的に分解・説明する

- (一〇) 柳宗元。
- (一一) 蘇東坡の弟、字は子由。

- (一二) E sop. 西曆前六世紀のギリシヤ人なりといふ。

能はざる不可思議力なり。哲學者は世の中の不可思議力を退治せむと心掛け、中には大早計にも最早世間には不可思議力は無しなご言ふ人すら出で來れり。然れども不可思議の領地は未だ容易に縮まるを見ず。勿論鬼神と思ひたる雷電も今は之を使役し、神怒と思ひたる地震も地中の火力作用なりと解説し、斯くの如く、理學の進歩と共に、多少世の所謂不思議なる物は除去せられたるが如しと雖も、その實は決して然ることなし。即ち人とは如何なるものか、何處より來れるか、何くに行くか、疑問茲に到らば、人彼自身も亦一の解釋する能はざる問題と言はざるを得ざるべし。人にして斯くの如しとせば、この人が不可思議力に支配せらるるも、亦何ぞ深く疑ふを須ひむや。蓋し靈感は神力なり。我自ら我より超越し、人自ら人より超越し、人間にあつて天使に類する行をなすが如きは、皆この靈感に本づく者なり。

* Jeanne d'Arc.
(1412—1431)

佛國の女傑。

然らば靈感を養ふ道ありや。靈感の來る恰も風の如し、人これを捕ふる能はず。然りと雖も、若しこれを得る道ありとせば、吾人はただ一あるを知るのみ。曰く、純一これなり。これを詳言すれば、脇目も振らず、忠純專一、一所懸命に働くことこれなり。吾人嘗てユーゴの語を聞く。曰く、婦人は弱し、然れども母は強し。と。弱き婦人も、母となれば強きは何が故ぞ。唯その幼兒を愛する一念は、弱き婦人をして勇氣を生ぜしむるにあらずや。至誠は神明に通ず。凡そ人眞面目になり、純一になり、一所懸命になる時に於ては、弱き人も強く、愚なる人も智に、無用の人も有用となるなり。即ち火事場に於て主婦が俄に力を生じて、箆笥を持搬ぶが如き、^{ジョアン嬢}が佛國田舎の一女子を以て、能く英國の大軍を退けたるが如きは、ただ之あるが爲のみ。^(徳富蘇峯の文に據る)

一一一 樹の根

松の樹に囲まれた家の中に住んでゐても、松の樹の根が地中で
どうなつてゐるかは餘り考へて見た事がなかつた。美しい茶褐色
の幹や、割合に色の浅い清らかな緑の葉が、永い馴染である松の樹
の全體であるやうな氣持がしてゐた。雨が降ると幹の色はしつと
りと落着いた潤ひのある鮮かさを見せる。緑の葉は涙に濡れたや
うなしほらしい色澤を増して來る。雨のあとで太陽が輝き出すと、
早朝のやうな爽やかな氣分が、樹の色や光の内に漂うて、いかにも朗
かな生の悦がそこに躍つてゐるやうに感ぜられる。折節可愛い小
鳥の羣が活き活きした聲で囀り交して、緑の葉の間を樂しさうに
往き來する。それが私の親しい松の樹であつた。

しかるに或時、私は松の樹の生えて居る小高い砂山を崩してゐ
る所に佇んで、砂の中に喰込んだ複雑な根を見たことがある。地上

と地下との姿が何と甚しく相違してゐたことであらう。一本の幹
と、簡素に竝んだ枝と、樂しさうに葉先を揃へた針葉と、それに比べ
て地下の根は、戦ひもがき、苦しみ、精一杯の努力をつくしたやうに、
枝から枝と分れて、亂れた女の髪の様、地上の枯幹の總量よりも
多いと思はれる太い根と細い根との無數を以て、一齊に大地に抱
きついてゐた。私はこのやうな根が地下にあることを知つてはゐ
た。併しそれを目の前にまざまざと見たときには、思はず驚異の情
に打たれぬわけには行かなかつた。私は永い馴染の間に、このやう
な地下の苦しみが不斷に彼等にあることを、一度も自分の心臓で
感じたことがなかつたのである。彼等の苦しみの聲を聞いたのは、
時折に吹く烈風の際であつた。彼等の苦しきやうな顔を見たのは、濕
りのない炎熱の日が一月以上も續いた後であつた。併しその叫聲
や萎れた顔も、その機會さへ過ぎれば、すぐに元の快活に歸つて、苦

しみの痕を滅多に残さない。しかも彼等は我等の眼に秘められた地下の營を、一日も怠つたことがないのであつた。あの美しい幹も葉も五月の風に吹かれて飛ぶ緑の花粉も、實はこのやうな勞苦の上のみ可能なのであつた。

この時以來松の樹のみならず、あらゆる植物に私は心からの親しみを感じずるやうになつた。彼等は我等と共に生きてゐるのである。それは誰でも知つてゐる事だが、私には新しい事實としか思へなかつた。

* * * * *

私は高野山へ登つた。さうして不動阪にさしかかつた時に數知れず立竝んでゐるあの太い檜の木から、何ごもいへぬ莊嚴な心持を押しつけられた。なるほどこれは靈山だと思はずにはゐられなかつた。この地を擇んだ弘法大師の見識にもつくづく敬服するや

うな氣持になつた。

それは外郭に連なる山山によつて、平野から切離された急峻な山の斜面である。幾世紀を経て來たか解らない老樹達は、金剛不壞といふ言葉に似つかはしいほど、ごつしりとした、迷のない、壯大な力強さを以て、天を目指して直立してゐる。さうして樹樹の間に漂うてゐる生生の氣は、ひたひたと人間の肌にも迫つて來る。私は底力のある興奮を心の奥底に感じ始めた。

私の眼はすぐに老樹の根に向つた。地中の烈しい營は既に地上一尺許のところ、明かに現れてゐる。土の層の深くないらしい此の山に育つて、あの亭亭たる巨幹を支へるために、太くて強靱な根は力かぎり四方へひろがつて、地下の岩にしつかりと抱きついてゐるらしい。あの巨大な樹身にふさはしい根の大きさは一體ごんなであらう。殊に相隣つた樹の根と入りまじつて、薄い地の層の間

に複雑にからみ合つてゐる有様は、想像するだけで既に驚異の情を起させる。

確に山は烈しい生の力の營によつて、残る所なく包まれてゐるのである。我等はこれを肉眼によつて見る事は出来なかつたが、併し一種の靈氣として感ずることは出来た。隠れたる努力の威壓が、神祕の影をさへ帯びて、我我に敬虔の情を起させずにはゐなかつたのである。

私は老樹の前に根の浅い自分を恥ぢた。さうして地中の營に没頭することを自分に誓つた。今氣づいてもまだ遅くない。

成長を欲するものはまづ根を確におろさなくてはならぬ。徒に上にのびる事をのみ欲するな。まづ下に喰入ることを努めよ。

* * * * *

早年にして成長のとまる、所謂早熟早老の人がある。根をおろそかにしたからである。

四十にもなつて急に美しい花を開き、やがて豊かな果實を結ぶ人がある。下に喰入る事に没頭してゐたからである。

私の知人にも理解のいい頭と、感激の強い心臓と、よく立つ筆とを持ちながら、まるで勞作を發表しようとしなない人がある。彼は今生きることの苦しさ、に壓倒せられて、自分のやうなものは生きる値うちもないとさへ思つてゐる。併しそれは彼の根が一つの地殻に突當つて、それを突破する努力に悩んでゐるからである。やがてその突破が實現せられた時に、どのやうな飛躍が彼の上に起るか。私は彼の前途を信じてゐる。根の確な人から貧弱な果實が生れる筈はない。

* * * * *

古來の偉人には雄大な根の營があつた。その故に彼等の仕事は、味へば味ふほど深い味を示してくる。

現代には、たとへ根に對する注意が缺けてはゐないにしても、ごもすればそれが小さい植木鉢のなかの仕事に墮してゐはしないか。如何にすれば珍しい變種が出来るだらうかと、如何にすれば豫定の時日の間に注文通りの果實を結ぶだらうかと、總てが甚しく人工的である。限られた土壤の中で纖細に發達した根は、深い大地に移されても、自由にその手足を伸ばすことが出来ない。天を衝かうとするやうな大きな願望は、いぢけた根からは生れる筈がない。

偉大なものに對する崇敬は、また偉大な根に對する崇敬であることを考へて見なければならぬ。

*

*

*

*

*

*

根のためには、出来るならば、地の質を選擇しなくてはならぬ。果實のためには、出来るならば根を培ふ肥料を選擇しなくてはならぬ。

根に對する情熱を鼓吹し、その根の本能的に好む所の土壤のありかを教へ、さうして幾千年來堆積してゐる滋養分をその根に供給してやるのが教育の任務である。

學校が植木鉢に墮するか否かは、人の問題であつて、制度の問題ではない。

教養は培養である。それが有效であるためには、まづ生活の大地に喰入らうとする根がなくてはならぬ。

人人は餘りに根の本能を忘れてゐはしないか。如何に貴い肥料が加へられても、それを吸収する力のない處では何の役にも立たない。私は教養の機會と材料とが吾々の前に乏しいとは思はない。

只それに相當する根が小さくて力弱いのを恐れる。
汝の根に注意を集めよ。(和辻哲郎—偶像再興)

一三 出 廬

嗚呼南陽の舊草廬

二十餘年のいにしへの

夢はたいかに安かりし

光を韜み香をかくし

隴畝に民と交れば

王佐の才に富める身も

ただ一曲の梁父吟

風に嘯く身はひとり

閒雲野鶴空闊く

ゆくへなみまの舟一葉

月を湖上に碎きては

訪ふは山寺の松の風

ゆふべ暮鐘に誘はれて

雪に驢を驅る道の上

江山さむる曙の

幽林陰を穿つとき

寒梅瘦せて春早み

* 支那の河南省南陽府より湖北省襄陽府に至る一帯の地をいふ。

伴は野鳥の暮の歌

紫雲たなびく洞の中

誰そや棊局を友の身は

空のあなたを眺むれば

その隆中の別天地

荒びて榮華さながらに

大盜きはひはびこりて

治亂興亡おもほえば

風の枯葉を掃ふごと

經綸胸に溢るれど

世は一局の棊なりけり

岡も臥龍の名を負ひつ

その世を治め世を救ふ

花また散りて春秋の

名利を俗に求めねば

信義四海に溢れたる

亂れし世にも花は咲き

背きはてめや知己の恩

うつりはここに二十七

姿は替へで立ちいづる

高眠遂に長からず

信義四海に溢れたる

君が三たびの音づれを

背きはてめや知己の恩

羽扇綸巾風輕き

姿は替へで立ちいづる

草廬あしたの主や誰

古琴の友よさらばいざ

残月の影よさらばいざ

蒼猿眠れ谷の橋

草廬あしたは主もなし

成算胸に藏まりて

ただ掌上を指すがごと

見よ九天の雲は垂れ

蛟龍飛びぬ淵の外

(土井晩翠「天地有情」)

曉さむる西窓の

白鶴歸れ嶺の松

岡も替へよや臥龍の名

乾坤ここに一局碁

三分の計はや成れば

四海の水は皆立つて

一四 人生の熱愛者

* フローベールは「藝術家は藝術の爲には人生をも犠牲にしてはねばならぬ」といふ意味のことを言つたさうである。これは飽く

* Guy de Maupassant.
(1821—1880)

佛蘭西の小
説家。

までも人生の冷酷なる観察者たらうとした彼の痛ましい程の覺悟を表した詞と思はれる。フローベールの一生がどういふ一生であつたか、委しくは知らない。併し自分が今ここで感じたことは、この冷かに人生の傍觀者たらうとする態度は、どうしても、飽くまで人生を経験し色讀し體達しようとする態度と衝突せざるを得ないといふ事である。その上に、自分は人生の傍觀者としての所謂冷酷なる觀察の價値に就ても疑問がある。

實生活の渦卷の中に捲込まれないやうにして、しかも其の一波一瀾の起伏をも見逃すまじと冷酷に見張られた眼には、人生は宛らに其の千態萬様を映じさうに思はれる。けれども、一擧手一投足にも藝術家的觀察の心掛を弛めない人が、果して眞によく人生の情趣に味到する事が出来るであらうか。固よりフローベールの様な天才の觀察は、その官能の鋭敏、その頭腦の明快、その非凡なるあ

*
藝術家である前

らゆる能力によつて、普通の人間が前後を辨へず、夢中になつて、感
激したり、懊惱したり、歡喜したりする心理の内奥の微妙にまでも
想到することが出来るであらう。併し自分には、一方に於て觀察者
たらうとする努力が、眞剣な生活の障礙にならぬものとはどうし
ても思へない。随つてこの點から見て、たとへ如何ばかり精到を極
めた觀察にしても、なほ一膜を隔てて内奥の消息に徹し得ぬ缺點
は免れ得ぬと思ふ。自分はどうしても純藝術家的態度に満足しな
い。又藝術家に人間としての豊富な眞剣な經驗がなければ、その藝
術は、どうしても一味の偉大さ深遠さを缺かざるを得ないと思ふ。
無論、フローベールに、人生の經驗がないといふのではない。自分は
そんなことに立入つて彼此いへる程、フローベールを知つて居る
者ではない。ここでは大體から見てその態度に就て言ふのである。
自分は思ふ、藝術家たることは必須なことではない。先づ人たる

に人である事。
(佛蘭西の彫刻
家ロダンの語)

を要する。藝術家は人生の描寫者たる前に、先づ人生の經驗者であ
らねばならぬ。山に入る者は山を見ず、といふけれども、坐ながらに
遠望する者は、山に入る者よりも山を知らぬ者である。假令、山の姿
を知つても山の眞實を知らぬ者である。人生を觀察する所の眼は
藝術家に取つて固より缺くべからざるものである。併し偏に藝術
家的態度に急ならむとする弊は、どうしてもその人をして人生の
皮相を觀察して人生を知り得たりとなし、人生の外部的現象を追
ふことが徒に細かになつて、その内的意味を逸するといふ様な弊
に陥らしめ易いと思ふ。客觀的に靜觀するのはよい。併し先づ主觀
的な豊富な經驗が欲しい。阪を登り、谿を涉り、巔を極めて、又野に下
つて山を見る人は、眞に山を知る人であると思ふ。若し零細な經驗
を種にして、直ぐ手輕に、冷酷なる觀察者に成りすました氣で居る
人があるなら、自分はその心事の淺薄を陋とするに躊躇しない。

如何にして人生を知るべきか。自分は、ここに至つて、愛するは解するなり。といふ陳い詞の新しい意味を發揮して來ることを認めずには居られない。人生を熱愛する人でなければ、人生の深い大きな意味にまで潛り入ることは出來ない。愛する者のみ深入することが出来る。自分達は人生の熱愛者によつて與へられた藝術を渴望する。それが或は憎惡痛罵呪咀の聲によつて現れて來ても、或は又一波浪の起伏もない冷靜の姿で出て來ても、その底に何處とも知れぬ、この熱愛の潮の鳴りごよめいてゐる藝術が欲しい。

今の或人は、人生に對して永遠の懷疑に居るなご口先では言ふけれども、その實は餘りに早く人生を見きはめ過ぎたのではあるまいか。彼等は人生の現實の相を憚らず見得たといふ大膽に自負して、更に人生の探究に進むことを止めた。彼等は空想の排斥せざるべからざるを呼號して、彼等の所謂現實の經驗なるものに行

(一) Humanity.
人道。

詰つた。彼等の苦笑には悲痛よりも寧ろ得意がある。要するに彼等の人生に對する愛は極めて淺かつた。

人生を愛する人の藝術は、即ちヒュマニティーの藝術であらう。しかし自分はヒュマニティーの藝術といふことを、唯單に義理人情といふ意味にのみは解釋したくない。一般にいふ義理人情といふ詞だけでは、内容の大きさや深さが足らぬ。忠義といひ孝行といひ、貞節といふ類の、ただ社會的家族的の道德よりも、又人道といひ、博愛といふ所謂世界的道德よりも、内的生命の愛重といふことは、ヒュマニティーの根本義であらうと思ふ。箇性の泉を深く自由に掘つた消息を傳へる、藝術こそは、力に乏しき者に力を與へ、萎靡したる内生活を振興せしめるのである。

自分は嘗て老子の「大道廢れて仁義あり」といふ言葉を讀んで、何となしに涙を催したことがあつた。そして何處やらにヒュマニテ

(二)
古の支那の思想
家。

イーの聲を聞く様に感じた偉大なる作家の作品からは、自分は常に人生に對する愛の響を聴取し得る様に思ふ。

現今の作品は一體に皆上手になつたけれども、併し出て來るものも出て來るものも、大方一樣になつて來た。これは自然の狀勢でもあらうから、徒に天才出でよと呼號しても、何の効果もあるまい。けれども若しこの時に新なる泉に掬する人があるなら、それは人生を愛する人であらう、人生のたぐりを深くすることを止めぬ人であらう。かくの如き人のみが獨り新なる天地を拓き得る。それは内より我等を動かし得べき人である。藝術上の新局面は唯描寫の態度によつて開拓され得るものでない。人生に對する根本的態度から導き來られねばならぬ。若し夫れ人生を愛するといふことが、徒爾な人生の謳歌といふ意味でないことの如きは、今更絮説する必要もあるまい。

最後に附言する。自分は以上主として藝術家の態度に就て語つて來たが、この根本精神は啻に藝術家の態度のみに限らず、宗教家、科學者、政治家、教育家、實業家、その他あらゆる人、農夫にでも、職工にでも共通するものであると信ずる。

畢竟するに、冷靜なるが如き傍觀的態度に偏することを自分は極力排斥する。眞に人生を熱愛し、渦中に投じて悲喜、歡樂、痛苦を具さに味ひ、生命のあらむ限り、理想に向つて勇往邁進しなければならぬと信ずるものである。(安倍能成の「思想と文化」に據る)

一五 歌人西行上

西行何者ぞ。天涯放浪の行脚僧、その名を一時の名流俊成(二)と齊しくし、鎌倉・室町の世(一)、そもそも歌道に於て定家を難ぜむ輩は冥加もあるべからず、罰を蒙るべきことなり。といはれし時、稱讚の聲また

(一) 藤原氏。當時最も名高き歌人の一人。
(二) 俊成の子。當時歌道に於ける第一人者の名を恣にせり。

定家に譲らず。近世に至つて定家の價値いたく墮落したれども、山家集の一書はなほ如何なる歌人の机邊をも去らず。西行の名今に嘖嘖たるは、そもそも何が故ぞ。

西行法師、俗名は佐藤義清、鎮守府將軍藤原秀郷が九世の孫なり。代代武を以て家を立つ。義清また勇敢にして弓術をよくす。和歌に堪能なるは蓋しその天稟なり。鳥羽上皇に仕へて北面の士となり、左兵衛尉に任ぜらる。上皇その才を愛して登庸せむとす。されど義清は名利を喜ばずして、常に厭離の志あり、その出家の動機については、或は傳へて曰く、嘗て同族左衛門尉憲康と同行して鳥羽殿より退出し、明日を期して別る。次の朝參朝せむとて、約に従ひて憲康を誘へるに、門の邊に人立騒ぎ、内には泣悲しむ聲聞ゆ。怪しと思ひて尋ぬれば、「殿は昨夜頓死したまへり。」とて、若き妻、老いたる母の重なり伏して歎くに、義清は惕然として遁世の念愈、堅く官を辭して

西行物語

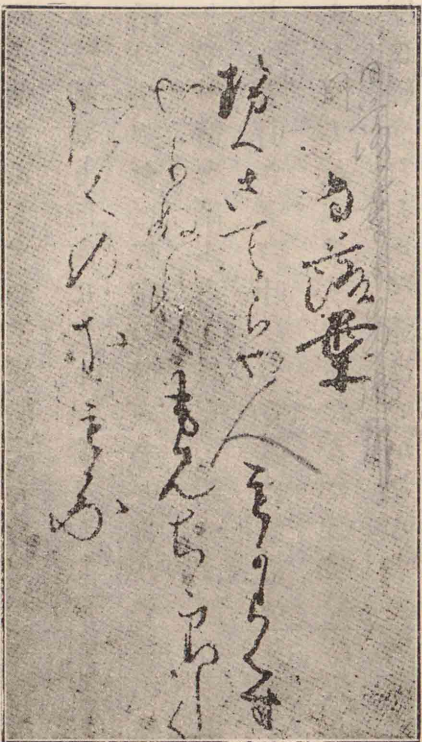
棄恩無爲
眞實報恩者

一八〇〇。

寺落葉
せきてらや人
もかよはすな
りぬればもみ
ぢりしくに
はのおもかな

靈妙ナル驗ヲ現

許されざれども「棄恩無爲」は如來の教なりと觀じ、四歳の女が父の歸れるを喜びて取絶れるを、これこそ愛着の絆を斷つはじめぞと、顧みもせで家を遁れ出で、嵯峨に到りて剃髮せり。かくて名を



西行法師筆蹟

西行または圓位といふ。出家せる時は保延六年にして、その歳まさに二十三なりきといふ。

野に隠れ、出でては熊野に參り、伊勢に詣で、鎌倉に下りて右幕下に見參し、進みて奥州に至り、西の方は中國より四國に渡りて、大師の靈場を拜み、それより筑紫に遊べり。常に謂へらく、桑門に家なし抖

擲して身を終ふべし。と。一蓋の笠。一條の杖。草の枕。苔の褥。東西にさ
 すらひ。自然を友とし。悠悠自適。興至れば。則ち和歌を詠ず。高尾の文
 覺。これを惡み。弟子に告げて曰く。遁世の身ならば。一筋に佛道修行
 の外。他事あるべからず。數寄を立てて。此處彼處に嘯きあり。く條。憎
 き法師なり。何處にても見會ひたらば。頭を打割るべし。と。その後。高
 尾の法華會に行脚の僧の參りあひて。花の蔭なご眺め歩き。坊に來
 りて。一宿を請ふあり。誰ぞと問へば。西行と申す者といふ。文覺手ぐ
 すねを引き。望の叶ひつる體にて。あかり障子を開きて出づ。しばし
 まもりて。年頃承り及びたるに。御尋悦び入り候。とて。迎へ入れて。饗
 應に餘念なし。弟子達はいかなる事の出で來むかと。手に汗を握り
 たるに。この體たらくにて。西行は無事に歸り去りしかば。日頃の仰
 なたがひたるは。と怪しみ問ふ。文覺答へて。あら。いひがひなの法師
 どもや。あれは文覺に打たれむざる者のつらやうか。文覺をこそ打

松ヤニ
ツケル
カ
スル

一八五〇。

應仁元年(三三〇)
 より文明九年(三三七)まで十一年
 間。
 元祿元年。(三三三)

たむずるものなれ。と言へりといふ。
 西行深く花月を愛し。また釋迦入涅槃。契を等しくせむことを
 思ひて。詠じて曰く、

ねがはくは花のもとにて春死なむ。そのきさらぎの望月の
 ころ

晩年。洛東雙林寺の邊に草庵を結びて閑居せるが。幽契違はず。建
 久元年二月十六日。七十三歳にして入滅せり。その和歌を集めたる
 もの。即ち山家集なり。

わが國。古來詩人多しといへども。深く自然にあこがれ。山川を無
 二の友として。生涯の過半を旅行の中に終へしもの。前後僅に三人。
 西行。宗祇。芭蕉。これなり。西行は。これが先達をなし。宗祇は。應仁亂離
 の折をも厭はず。西行に私淑して。その跡を追ひしもの。芭蕉は。元祿
 泰平の機に乗じて。また西行。宗祇が行狀を慕ひしもの。とす。西行は

歌道稀有の名手、宗祇は連歌第一の大家、芭蕉は俳諧に正風の眼を開きし偉人、各その道に一期を劃せし三家が、いづれも風月に放浪し、雲水に吟嘯せしことを思へば、旅行がいかに詩人の吟囊を肥すものなるかを知るべし。

一六 歌人西行下

そもそも平安朝の貴紳、淑女は、鴨、桂、二川の流域、數里の間を己が世界とし、海も見ぬ天地に跼蹐して、足畿外に出でず、一生の經過極めて單調に、感情を刺衝するものなければ、隨うて思想の發展もある事なし。見聞するところは、東山の花、西山の紅葉、いつも同じ京洛の風物より外に知らざれば、詠ずる所の和歌も變化を見ず。子は父に繼ぎ、孫は祖父を承け、ただ同じ詞花言葉を飾るのみにて、累代繼承し行けば、和歌の思想、辭句の上にも、おのづから典型を生じて天

眞を忘れたり、かく實情を離れ、虚偽に流れ、浮華、輕薄徒に形式を飾りてその内容を問はざりし時、西行獨り蹶起して、從來蹈襲せる典型を簸却し、自ら山水の間に逍遙して、直接に自然の隱微を探り、感得する所多かりき。平安朝の末、崇徳院の御製が殊に斷腸の響あるは、その悲惨なる實境を詠じ給へることの、世上一般の題詠と撰を異にすればなり。わけて西行が歌ふところ、一も古人の粉本を摹倣せず、一字一句みな己が肺腑より出づ。數百年の後なほ名聲赫赫として、天成の大才と許さるることまた宜ならずや。

西行既に古來の典型を捨てて、直に自然の堂奥に入らむとす。深く山川草木を愛して、之を視る事猶己を視るが如く、同情の念に堪へざるは固より然るべきことなり。

わきて見む老木は花もあはれなり
いまいくたびか春にあふべき

ここにまた我が住みうくてうかれなば松はひとりになら
むとすらむ
にごるべき巖井の水にあらねども汲まば宿れる月やさわ
がむ

同情は進んで愛着となりぬ。西行は官祿を捨てたり、妻子を捨て
たり、すべて世間を捨てたり。されどゆかしき花よ、月よ。

おのづから花なき年の春もあらば何につけてか日を送ら
まし

うちつけにまた來む秋のこよひまで月ゆる惜しくなる命
かな

愛着は迷なり。この雲を去らざれば眞如の月は明かなり難しと
雖も、山水もと無心にして、人間の如き魔性を有せず。これを以て窓
前日夜の友とす。清淡虚無一心もまた物によつて動かされざるこ

と山の如く、機に従うて轉ずること水の如し。來往自在。ここに疑懼
の境も去つて、安心は漸く決定すべし。

いまさらに春を忘るる花もあらし安く待ちつつ今日も暮
さむ

雲にただ今宵の月をまかせてむ厭ふとしても晴れぬもの
ゆる

西行の信仰は、これを佛徒として見ば、なほ或は差別の見を脱す
る能はざる小安心に過ぎざらむ。しかも世を舉げて翦綵の末技に
汲汲たるとき、巍然として衆俗を抜いて立ち直に天然に接觸して、
感ずる所即ち歌となれり。その歌は企てて成すものにあらずして、
自ら成れるなり。その自然にして平易に殆ど斧鑿の痕を存せざる
はそれが爲なり。

ながむるに慰むことはなければも月を友にてあかすころ

かな
今よりはむかしがたりはこころせむ怪しきまでに袖しを
れけり

要するに、西行は生れながらの歌人にして、歌を作るものに非ず。天籟吹き來つて松濤即ち鳴る。その聲必ず自然を離れず。平易率直を旨とするも、風激しければ鳴る事も亦強し。時に婉曲の響あれども、故らに人為の巧を加へねば、天成の詩美は千歳の下愈、光を増して、後人をして渴仰止まざらしむるなり。(藤岡東圃一國文學全史)

一七 銀の猫

文治(一)その年の秋八月十五日、鎌倉の大將殿、鶴ヶ岡の宮居に詣でさせ給ふ。例の事にて、御供仕うまつる人人、御前追ひ、御後べ仕うまつれり。渚に遊ぶ蘆鶴のあゆみして、疾からず、遅からず、列を亂さ

(一) 文治二年。(八四六)
(二) 右大將源頼朝。

ず、練出でさせ給へるを、大路に膝折りふせ、畏み奉る人數多あるに、警衛して、あな(三)に言はせず、世にいかめしく尊き御有様なり。廣前を罷りて、御手輿に召させ給ふほど、御階の忌垣(四)のもこにかしこまり居る法師の見上げ奉る面つき、旅に飢ゑていと瘦せ、黒みづきたるに、衣杖笠なども乞食者の様したるを、鋭き御眼尻にこごめさせ給ひ、ただ人ならずや思しけむ、あの法師が修行するやう、名をも問へ。と仰せ給ふ。御輿ぞひの若侍、急ぎ走り寄りて、ありがたく御目給へり。何處よりの修行ぞ、名をも申せ。といふ。ゆくりなきに驚きたる様して、雲水に在處定めず侍るものにて、名は圓位と申す。といふ。聞し召されて、さればこそ聞知りたれ、穴熊の猛き獲物の類ならで、賢き人得たるためしに誘ひ歸らむ。わが後につきて來れといへ。とて、召連れさせ給へり。
御館(五)に入らせ給ひ、御装束あらためさせ給へば、やがておほとな

(三) 西伯將出獵、ト之、曰、所獲非龍、非虺、非虎、非獰。所獲霸王之輔。於是西伯獵、遇太公於渭之陽。(史記)

ぶら數多照し挑げたり。けふの道ゆきづと率てこ。と仰せ給ふ。法師
 まゐれ。とて、御座近き簀子に召されたり。大將殿見おこせ給ひて、昔
 は藐姑射の山の御宮仕せし人の世をはかなきものに思ししみて、
 身は黒く糞したれど、月花の譽は物の心なきあづま人さへ聞知り
 たるぞ。八百日ゆく濱の眞砂の中には、玉ごも多く拾ひをさめたら
 むを、語りて聞かせよ。と仰せ給ふ。

「いとも輝かしきにぞ、ただ夢路を辿るやうに侍りて聞え奉るべ
 き事も侍らず。さとき御眼に見あらはされて侍るこそいとも有り
 難けれ。伊勢の海清き渚におりたつならひは侍れど、よろしき貝を
 だにえ拾ひ侍らぬに、これにて捧げ奉るべくもあらず。君にも豫て
 學ばせ給ふと漏り聞き奉る。天の下まつりごち給ふ御器の大いな
 るに思し寄せ給ふには、かけても及ぶまじきをさへ思ひ知り侍
 る。大空に羽うちて飛ぶ鶴の聲、霜枯の淺茅が下の蟲の音、いかで取

三ツフ區別セリ。
 三年度高師
 勤勤ノ主ガ我(貴人ニ対シテ)
 侍リテ(コノリマシテ)
 動作、主ガ人
 二ツツフリとチ給ふ
 自分カ量ヒテ云フ
 見奉ル
 貴人ノ動作ヲ
 我カ見ルコト

りなめて聞え上ぐべき。あな畏し。と申す。

打笑ませ給ひ、弓取りし人の元の心の猛きには、詠む歌も直く明
 らさまに聞かぬは實か。歌は武士の荒荒しき心には詠み得まじき
 ものに、宮人達は沙汰し給へりこや。軍に出立ちて、笛鼓の音、馬の嘶
 は物とも思はぬを、この三十字餘りの學びには心の後るるは如
 何に。こは畏き御心にも思し惑はせ給ふものか。古の代代の帝は、馬
 に鞍おき御弓矢取らして御軍に立たせ給ひし、その御歌を讀み見
 奉れば、猛く直直しく、調もいと高し。こを聞きわたり侍れ。いでや、
 歌よまむとては、益荒男の心を取隠し、あてになよびかにのみ詠出
 でまくするこそ、この道のいみじき煩なれ。君がささく猛き御心の
 ままに打詠ませ給はむには、今の世の人誰かは並びあへ奉らむ。三
 尺の劔を取りて、大風起り雲飛揚す。と歌ひ、槊を横たへて、烏鵲南に。
 と詠ぜし君達は、鞍の上にて文に遊ばせ給ふならずや。玉造等がい

(一) 大風起兮雲飛揚。威加海內。今歸故鄉。安得猛士兮守四方。(漢高祖)
 (二) 月明星稀。烏鵲南飛。遶樹三匝。何枝可依。山不厭高。海不厭深。周公吐哺。天下歸心。(曹操)

みじく磨りみがきたるも、染殿の八入の色も、はかなき目移りばかりは何にかは。されど谷深き鶯の聲、信濃路出づる荒駒の歩、何れも道、何の業にも、初より優れたらむは鬼にこそ侍らめ。といふ。

「人人、あれ聞き給へ。世は捨て遁るるも、頼もしき人の心ならずや。圓位よ、汝が遠つ祖の秀郷といひしは、世にいみじき弓の上手となむ聞ゆる。傳へたる事もあるべし。かくこそ思ひしみぬる事は、忘れずてぞあらむ。事一言にても教へ承らばや。」こは益、恐ある御問はせなり。御物語の果て果ては、武士の道しばしも怠らせ給はぬ御心より、野山を住處の瘦法師にだに問はせ給ふことの忝さよ。向ひ奉りては、烏滸がましく、何をかは家の傳はりなごとて聞え奉るべき。まして有り難き大宮仕を否み奉り、親たちの慈しみをさへあだなるものに思ひなして、年僅に二十三にして家を出でたるいたづら者の、弦ひかむすべだに心にもとごめ侍らず。ただ一言の忘れがた

鎮守府將軍藤原秀郷。圓位の祖父。

きは、賞を重くし罰を軽くせよ。言ひしに任ずるものを辱しむれば危しと言ひし事このみ。病める士卒の痘を吮ひしは人の心をよく買ひなす。雖も眞の情よりとも覺え侍らず。竈を減じて人を危きに陥るるは、將帥のさかしきにて、國を治め天の下を知るべき。君の御心にあらず。さはれ、軍を出し給へる事の怪しきまで賢くおはするを餘所ながら聞き奉るには、この方の御問、免させ給へ。さて、額を板敷に擦りつけて申す。

君笑みほこらせ給ひ、口とく、心さかしき法師なり。今宵は月見る夜ぞ。人人と土器取りはやし、曉かけて遊ばむ。まらうごは酒呑まざるべし。鹿、猿の中に立雜りて歌詠めといふとも詠むまじ。ただ我が前にて遊べ。飽かず飲み、物きたなげに喰ひちらす。人人は暖かにこそ。風ひややかなるに、この火取りて法師に參らせよ。さて、白銀をもて作れる猫の形したるを取傳へて、君より賜はす。とて前に置きた

卒有病痘者、起爲吮之。(史記、吳起傳)
孫賸使齊軍入魏地、爲十萬竈。明日爲五萬竈。又明日爲三萬竈。龐涓行三日、大喜曰、我固知齊軍怯、入吾地三日、士卒亡者過半矣。乃塞其步軍、與其輕銳、倍日并行逐之。孫子度其行、暮當至馬陵。馬陵道狹、而旁多阻隘、可伏兵。乃斫大樹、白而書之曰、龐涓死于此樹之下。(史記、孫子傳)

り。鹿猿はなほ心猛し。鼠をだにえ捕らぬ瘦法師がためには、げに似つかはしき御賜物ぞ。さて、三度押戴きて、翌朝御暇賜はりて立出づるに、御館の人やごりに誰人の童ならむ、括り袴の裾朝露に濡れそぼちて、いと寒げに居るを見て、これ取らせむ。火埋みて、手足あたためよ。とて、かのきらきらしき物を與へて、顧みもせで立去りぬ。

童打驚きて、これ見給へ。見も知らぬ法師の見も知らぬもの賜ひつるは、さて、青侍に見すれば、目口をはたけ、かく尊き寶物を誰かは得させむ。拾ひやしつる。といふ。更に更に、道のそらに斯かる物やあるべき。あな恐し。殿に奉りてたまへ。といふ。やがて御館にもて参り、仕ふる君を呼出でて、しかじかの事なむと申す。いと怪し。大將殿の法師に賜ひしを、いかで童には得させむ。訝し。さて、まづ急ぎて聞え奉る。君打笑み給ひ。かの似而非法師、あなづらはしく、幼げなるものくれし。さて、腹立たしくや思ひけむ。わが門の前に捨てゆきつ

るよ。一度似而非者の手に穢れしもの、その童に取らせよ。とて取りおろさせ給ひぬ。

西行、後にこの事を人に語りていふ。右府は寔にねぢけたる君なり。口に蜜あれど、心には針のおはするぞ。漢高の大度、曹孟徳の智略あるに似て、天下の人皆この君の網の中に入れられたるは、佛の冥福といふことを生れ得たまひけむ。ただ悲しむべきは、神の御裔の、此の後やうやう衰へさせ給はむ世の姿なるは、とて、涙留め難くして物がたりしとなむ。心なき身にもこれを聞傳へては、秋の夕暮ならずも、打響みぬべし。(上田秋成「藤室册子」)

一八 鎌倉三代

武きもののおのふのおこりを尋ねれば、古の田村利仁なごいひけむ。將軍ごもの事は、耳遠ければさしおきぬ。そのかみより今まで、源平

心なき身にもあはれは知られけり。鳴立つ澤の秋の夕暮(僧西行)

阪上田村麿。藤原利仁。

の二ながれぞ、時により、折にしたがひて、おほやけの御守とはなりにける。

葛原親王
高見王
高望王
國香—貞盛
維衡—正度
正衡—正盛
忠盛—清盛

時やいたりけん
到りて

桓武天皇と聞えし御門をば柏原御門とも申しけり。その御子に式部卿の御子と聞えしより五代の末に平將軍貞盛といふ人、維衡・維時とて二人の子をもたりけり。間近く榮えし西八條の清盛のおとごは、かの太郎維衡より六代の末なりき。その一門亡びしかば、この頃は僅にあるかなきかにぞさまよふめる。さてかの維時が名残は、ひたすらに民となりて、平四郎時政といふ者のみぞ、伊豆國北條さかやにあめる。それも、維時には六代の末なるべし。

又源氏武者といふも、清和御門あるは宇多院などの御後ごもなり。二條院の御時、平治の亂に伊豆國蛭ヶ島へ流されし兵衛佐賴朝は、清和御門より八代の流に、六條判官爲義といひし者のうま子なり。左馬頭義朝が三郎になむありける。

後白河天皇の尊稱

西八條の入道おとご、やうやう榮華衰へむとして、後白河院をなやまし奉りしかば、安からずおぼされて、かの賴朝を召出でて、軍を起し給ひしに、然るべき時やいたりにけむ。平家の人人は、壽永の秋の木枯に散りはてて、遂にわたつ海の底の藻屑と沈みにし後、賴朝いよいよ權を施して、更に君の御後見仕うまつる。相模國鎌倉の里といふ所に居りながら、世をたなごころの中に思ひき。皆人知り給へる事なれば、今更に申すもなかなかなれど、院の上、位につかせ給ひし初より、世のかためとなりて、文治元年四月、二のはしをのぼりしも、八島の内のおとご宗盛をいけごりの賞と聞ゆ。建久の初つ方、都にのぼる。その勢のいかめしき事、いへば更なり。その年の十二月九日、權大納言になされ、右近大將をかねたり。師走の朔日ごろ、よろこび申して、同じき四日、やがてつかさを還し奉る。この時ぞ、諸國のそうつゝあぶくしといふこころけたまはりて、地頭職にわが家のつ

はものごもなし集めける。この日本國の衰ふる初は、これよりなるべし。

比叡山の座主慈圓の敬稱。

さて、東に歸り下るころ、上下いろいろのぬさ多かりし中に、年ごろも祈りなごし給ひにし吉水僧正のたまひつかはしける。

あづまぢのかたに勿來の關の名は君をみやこに住めとなりけり
イツマヂと云フ近リニアル勿來の關。

御かへし頼朝

みやこには君にあふさかちかければ勿來の關はとほきとをしれ

土御門天皇の尊稱。

かくて、新院の御位の初つ方、正治元年正月、あづまにて頭おろして、同じき十三日に年五十三にてかくれにけり。

治承四年より、あめの下にもちひられて、二十年ばかりやすぎぬらむ。北の方は先に聞えたる北條四郎時政の女なり。その腹に、をの

子ふたりあり。太郎をば頼家といふ、弟をば實朝と聞ゆ。大將かくれてのち、兄はやがて立ちつぎて、建仁元年六月二十二日、從二位、同じき日、將軍の宣旨を賜はる。又の年、左衛門督になさる。かかれども少し落ちぬ心ばへなごありて、やうやう、つはものごも、背き背きにぞなりにける。

時政は遠江守といひて、故大將のありし時より、わたくしのうしろ見なりしを、まいて今は孫の世なれば、愈身重く、勢をふこと限なく、て、うけばりたる様なり。子二人あり。太郎は宗時といふ、次郎は義時といひけり。次郎は心も猛く、魂まされる者なるが、左衛門督をばふさはしからず思ひて、弟の實朝の君に附從ひて、思ひ構ふることなごもありけり。かうは日にそへて人にも背けられ行くに、いみじき病をさへして、建仁三年九月十六日、年二十二にて頭おろす。世のなか残多く、何事もあたらしかるべき程なれば、さこそ口惜しかり

金銀出納

* 頼朝を指す。

けめをさなき子の一萬といふにぞ世をば譲りけれど、うけ引くものなし。

入道は、かの病つくるはむとて鎌倉より伊豆國へ、いでゆあびに越えたりける程に、かしこの修善寺といふ所にて、つひに討たれぬ。一萬もやがてうしなはれけり。これは實朝と義時とひとつ心にたばかりけるなるべし。

さて今はひとへに、實朝故大將の跡をうけつぎて、官位滞る事なく、よろづ心の儘なり。建保元年二月二十七日正二位にせられしは、閑院の内裏造れる賞とぞきこえ侍りし。同じき六年、權大納言になりて左大將をかねたり。左馬頭さへぞつけられける。その年、やがて内大臣になりても、なほ大將もこのままなり。父にもやや立ちまさりていみじかりき。

このおとごは、おほかた心ばへうるはしく、猛くもやさしくも、よ

ろづ目やすければ、こころわりにも過ぎて、武士の靡き従ふさま、父にも越えたり。いかなる時にかありけむ。

山はさけ海はあせなむ世なりとも君にふたごころわがあらめやも

ごぞよみける。

時政は建保三年にかくれにしかば、義時ぞ跡をつぎける。

故左衛門督の子にて公曉といふ大徳あり。親のうたれにしこころを、いかで安き心あらむ。いかならむ時にかこのみ思ひわたるに、この内大臣、又右大臣にあがりて、大饗なごめづらしく東にておこなふ。京より尊者をはじめ、上達部殿上人、おほくとぶらひいましけり。さて鎌倉にうつし奉れる八幡の御社に神拜に詣づる、いといかめしきひびきなれば、國國の武士は更にもいはず、都の人人もこせうしけり。たち騒ぎののしり、物見る人も多かる中に、かの大徳うちま

ぎれて、女のまねをして白きうす衣ひきかづき、おとごの車よりお
 るる程を、さしのぞくやうにぞ見えける、あやまたず首を打落しぬ。
 その程のとよみ、いみじさ、思ひやりぬべし。かくいふは承久元年正
 月二十七日なり。そこらつごひあつまれるものごも、只あきれたる
 ほかなし。京にも聞し召しおごろく。世の中火をけちたるさまなり。
 こせうに西園寺の宰相中將實氏もくだり給ひき。さらぬ人人も泣
 く泣く袖をしぼりてぞのぼりける。いまだ子もなければ、たちつぐ
 べき人もなし。事しづまりなむ程とて、故おとごの母北のかた、二位
 殿といふ人、二人の子をも失ひて、涙ほすまもなく、しをれすぐすを
 ぞ將軍にもちひける。(増鏡)

二
 尼將軍平政子の
 敬稱。

一九 徒然草抄

花と月

二
 たれこめて春の
 ゆくへも知らぬ
 まに待ちし櫻も
 うつろひにけり
 (古今集、藤原國
 香)

花はさかりに、月は隈なきをのみ見るものかは。雨にむかひて月
 を戀ひ、たれこめて春のゆくへ知らぬも、なほあはれになさけ深し。
 咲きぬべき程の梢散りしをれたる庭なごこそ見所おほけれ。歌の
 詞書にも、花見にまかりけるに、早く散りすぎにければ、とも、障る事
 ありてまからで、なご書けるは、花を見て、といへるに劣れることか
 は、花の散り、月の傾くを慕ふならひはさる事なれど、殊にかたくな
 なる人ぞ、この枝、かの枝散りにけり。今は見所なし。なごはいふめる。
 よろづの事は始終こそをかしけれ。望月のくまなきを千里の外ま
 で眺めたるよりも、曉近くなりて待ちいでたるが、いと心深う、青み
 たるやうにて、深き山の杉の梢に見えたる木の間の影、うちしぐれ
 たるむら雲がくれのほご、またなくあはれなり。椎柴、白樫などの、濡
 れたるやうなる葉の上、にきらめきたるこそ、身にしみて、こころあ
 らむ友もがなご、都こひしうおぼゆれ。

第十九段

(一) 春はただ花のひさへに咲くばかり物のあはれは秋ぞ優れる(拾遺集、讀人知らず)

(二) 五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする(古今集、讀人知らず)

すべて月花をばさのみ目にて見るものかは。春は家をたち去らでも、月の夜は聞の内ながらも思へるこそ、いとたのもしうをかしけれ。 五五原、
二、四季のあはれ
折節のうつりかはるこそ物ごこにあはれなれ。物のあはれは秋こそまされと人ごとにいふめれど、それもさるものにて、いまひときは心もうきたつものは春の景色にこそあめれ。鳥の聲などもこの外に春めきて、のどやかなる日影に垣根の草もえ出づる頃より、やや春ふかく霞み渡りて花もやうやうけしきだつほどこそあれ、をりしも雨風うちつづきて、心あわただしく散りすぎぬ。青葉になり行くまで、よろづにただ心をのみぞなやます。花橘は名にこそ負へれ、なほ梅の(三)にほひにぞ、古の事もたちかへりこひしう思ひ出でらるる。山吹のきよげに、藤のおぼつかなきさましたる、すべて思

あはれと思ほゆれたが種ふれし宿の梅ぞも(古今集、讀人不知)

ひすて難きこと多し。
灌佛の頃、祭の頃、若葉の梢涼しげに茂り行くほどこそ、世のあはれも人のこひしさもまされと、人の仰せられしこそ、げにさるものなれ。五月あやめふく頃、早苗とる頃、水雞のたたくなご、心細からぬかは、六月の頃、あやしき家に夕顔の白く見えて、蚊遣火ふすぶるもあはれなり。六月祓またをかし。
七夕まつるこそなまめかしけれ、やうやう夜寒になるほど、雁啼きてくる頃、萩の下葉色づくほど、早稲田かりほすなご、ごりあつめたる事は秋のみぞ多かる。また野分のあしたこ



そをかしかれ。

さて冬枯の景色こそ、秋にはをさをさ劣るまじけれ。汀の草に紅葉の散りとごまりて、霜いと白うおけるあした、遣水より煙の立つこそをかしかれ。年の暮れはてて人ごごに急ぎあへる頃ぞ、又なくあはれなる。すさまじき物にして見る人もなき月の寒けくすめる、二十日あまりの空こそ心細きものなれ。御佛名、荷前の使立つなどぞ、あはれにやむごとなき。公事ごもしげく、春のいそぎにさりかさねてもよほし行はるるさまぞいみじきや。



(一) 十二月十九日より三日間、佛名を唱ふる公事。
(二) 御陵と功臣の墓に幣帛を奉る救使。
(三) 十二月晦日の夜

(四) に、惡鬼を追ふ公事。
(五) 元日寅の時に、天皇の四方及び山陵を拜し給ふ儀式。

追難より四方拜につづくこそおもしろけれ。つごもりの夜いたう暗きに、松ごもごもして、夜半すぐるまで人の門たたき走りありきて、何事にかあらむ、ことごとしくのしりて、足を空にまごぶが、暁がたよりさすがに音なくなりぬるこそ、年のなごりも心細けれ。亡き人の來る夜きて魂祭るわざは、このごろ都にはなきを、あづまの方にはなほする事にてありしこそあはれなりしか。かくて明けゆく空のけしき、きのふにかはりたりとは見えねど、ひきかへめづらしき心地ぞする。大路のさま、松立てわたして、花やかに、うれしげなるこそまたあはれなれ。

一〇四頁 三三 名利

名利につかはれて靜なるいごまなく、一生を苦しむこそおろかなれ。だから多ければ身をまもるにまごし。害をかひ、わづらひを招くなかだちなり。身の後には金をして北斗をさそふとも、人のため

(五) 身後堆、金挂、北斗、不如、生前、樽酒、(白樂天)

(一) 藏金於山、藏珠於淵、不利貨財、不近富貴、不樂壽、不哀天、不榮達、不醜窮、(莊子)
 (二) 龍門原上土、埋骨不埋名、(白樂天)

にぞ煩はるべき。愚なる人の目をよろこばしむるたのしみ、又あぢきなし。大いなる車、肥えたる馬、金玉のかざりも、心あらむ人はうたて愚なりとぞみるべき。金は山にすて、玉は淵になぐべし。利にまごふはすぐれて愚なる人なり。

うづもれぬ名をながき世に残さむこそあらまほしかるべけれ。位高くやむごとなきをしも、すぐれたる人とやはいふべき。愚につたなき人も、家にうまれ時にあへば、高き位にのぼり奢をきはむるもあり、いみじかりし賢人、聖人、みづからいやしき位にをり、時にあはずして已みぬるまた多し。ひとへに高きつかさ位をのぞむも、次に愚なり。

四、虚言

世に語りつたふる事誠はあいなきにや、多くは、みな虚言なり。あるにも過ぎて人は物をいひなすに、まして年月過ぎ、境も隔たりぬ

れば、いひたきままに語りなして、筆にも書きとごめぬれば、やがて定まりぬ。道道の物の上手のいみじき事など、頑なる人のその道知らぬは、そぞろに神の如くにいへども、道知れる人はさらに信も起さず。音に聞くと目に見る時とは、何事もかはるものなり。かつあらはるるをも顧みず、口に任せていひ散らすは、やがて浮きたる事。聞ゆ。又、我もまことしからずは思ひながら、人のいひしままに鼻のほごをごめきていふは、その人の虚言にはあらず。げにげにしく所所うちおぼめき、よく知らぬ由して、さりながらつまづまあはせて語る虚言はおそろしきことなり。わがため面目あるやうにいはいれぬる虚言は、人いたくあらがはず、皆人興ずる虚言は、ひとりさもなかりしものを、こいはむも詮なくて聞き居たる程に、證人にさへなされて、いごご定まりぬべし。ごにもかくにも虚言多き世なり。ただ常にある珍しからぬ事のままに心得たらむ、よろづにたがふべか

* 子不語怪力亂神(論語)

らず。下さまの人の物がたりは、耳驚くことのみにあり。よき人は怪しき事を語らず。

二一〇三 五、己を知る

高倉院の法華堂の三昧僧、なにがしの律師とかやいふもの、ある時、鏡を取りて顔をつくづくと見て、我が貌の醜くあさましきことをあまりに心うく覺えて、鏡さへうとまじき心地しければ、その後長く鏡を怖れて手にだに取らず。更に人にまじはることなし。御堂の勤ばかりにあひて籠り居たりと聞き侍りしこそ有りがたく覺えしか。かしこげなる人も、人の上をのみはかりて、おのれをば知らざるなり。我を知らずして外を知るといふことわりあるべからず。されば、おのれを知るを物知れる人といふべし。貌醜けれども知らず、心の愚なるをも知らず、藝の拙きをも知らず、身の數ならぬをも知らず、年の老いぬるをも知らず、病の冒すをも知らず、死の近きを

も知らず、行ふ道の至らざるをも知らず、身の上の非を知らねば、まして外の毀を知らず。ただし、貌は鏡に見ゆ、年は數へて知る。わが身のこと知らぬにはあらねど、すべき方のなければ知らぬに似たりとぞいはまし。貌を改め、齡を若くせよごにはあらず。拙きを知らば、何ぞやがて退かざる。老いぬご知らば、何ぞ閑に身を安くせざる。おこなひ愚なりと知らば、何ぞこれを思ふことこれにあらざる。すべて人に愛樂せられずして衆に交るは恥なり。かたち醜く、心おくれにして出で仕へ、無智にして大才に交り、不堪の藝をもちて堪能の座に列なり、雪の頭を戴きて盛りなる人にならび、いはむや及ばざること望み、叶はぬことをうれへ、來らざること待ち、人におそれ人に媚ぶるは、人の與ふる恥にあらず、貪る心にひかれて、みづから身をはづかしむるなり。食ることこのやまざるは、命を終ふる大事。今ここに來れりご確に知らざればなり。(吉田兼好「徒然草」)

二〇 生活の根本的基礎

余は原則として、生活には必ず苦痛が伴ふものと考へてゐるから、嘗て如何にして安樂に生活し得べきかと思ひ煩つた事がない。併しながら、如何にせば眞面目にして確實なる生活を爲し得べきかに就ては、自分でも始終考へてゐるし、また時には人にも語つたことがある。そこで、今茲に主としてこの確實生活の根柢に就て述べて見ようと思ふ。確實生活と言つても、別に新しいものではない。要するに昔から言ひふるされて來た月並的な堅實主義に外ならぬ。けれども、少くも自分にこつては、この堅實主義は何程か體験的保證があるので、單なる説法以上の實際的權威を持つてゐるものと信じてゐる。

然らば、その堅實主義とは如何なるものであるかといふに、概括

的に言へば、堅實なる人格的修養と約言する事も出来るが、余はこれを三段に分けて考へてゐる。その第一は能力の修養である。即ち、自己の役目なり學藝なりに關して、その技藝を練磨することである。何時の世でも左様であるが、特にこれからの時代は全く實力の世である。一藝一能に達して居らぬものは、生きがひのある生活をするところが殆ど不可能である。世にはさしたる能力もなくして、外見上はかなり能力あるやうに裝うてゐる人もあるけれども、それは單の欺瞞で、斷じて確實な生活ではない。次第に競争が激しくなるにつれ、自然に淘汰され凋落せねばならぬ者である。眞に確實な安心な生活をして行くためには、自己の腕に對する確信が必要である。隨つて之がためには、何事をするにしても絶えず自己の腕を磨いて、何時何處に出ても一本立で行き得る底の實力を養つて置かねば絶えず不安に襲はれねばならぬ。よく求職者の中には、自己

の腕を磨くことは棚にあげて、徒に何等かの情實の同情を辿つて
良き地位を得ようなどとあせる者もあるけれども、之は非常な心
得違である。いかに情實の重んぜられる世といへ、少くも相當の
實力のない者に對しては、下から押上げる譯にも、上から引上げる
譯にも行かないではないか。之に反して、實力さへ確實であれば、そ
の人の性格に特別の缺點のない限り、遅かれ、早かれ、何時かは必ず
芽を出す時節が到達せずには居ない。勿論世に立つて行くには、先
輩、同輩、後輩の同情庇護に依らねばならぬ。併しその中心となるも
のは畢竟自己の實力である。この實力のあることは生活上の最大
の強みで、随つて最も確實な原則である。

併しながら、確實生活の基礎を單に能力一點のみ考へるなら
ば、それは大なる誤謬である。世にはかなりの實力を備へ、而も外見上
かなりの成功をしてゐる様な人でも、自らその一生を清算して見

れば、却て失敗の生活をしてゐる人の尠くないのは何の爲であら
うか。之には種種の原因もあらうが、その大部分は道德的缺陷の件
なふがためである。蓋し道德的缺陷は、外見的成功の大きければ大
きい程、その生活に對する暗黒面を構成することも大きく、絶えず
その生活を苦しめるからである。まして、世には相當の實力を有し
ながら、道德的缺陷のために全然失敗の一生を送る者の非常に多
いに於てをや。

そこで確實生活の第二綱領は、道德的修養を積むといふことで
あらねばならぬ。即ち自己の性格を陶冶して、道德的缺陷に陥るこ
とのない様にする事である。勿論道德的修養とは言へ、所謂君子と
か仁人とかいふ如き模範的道德家たれといふ意味ではない。蓋し
斯かることは望ましくはあるが、常人に強ひて之を求めようと思
れば、却て動もすれば消極的な而も偽善を養ふ弊に陥るからであ

る。余の此處で言ふ道德的修養とは、要するに健全なる常識的道德判断を以てして、少くも平均線以上に出づる様にせねばならぬといふ事である。これは消極的に言へば、公的生活は勿論のこと、私的生活を公開しても、よしや模範的にはならなくとも、少くとも、後めたい處のない程の生活を期することである。出來得べくんば、自己を天下の照魔鏡に照しても常に光風霽月の心境に居りたい。斯かる生活が確實であるのは改めて言ふ迄もなからう。

之に反して、道德的^二重生活^一をすることは最も避けねばならぬ。内と外言と行と相反する生活を一身に兼ねて生きねばならぬといふ事は、ごれだけ吾等の眞を害し、その勇を挫き、果ては常に不安の生活を將來するものであるかは、如何なる人も多少は經驗した事であらう。特に内面生活が一旦暴露されると、その人の地位なり、名聲なりが、根柢から動搖すると言つた様な祕密を有する人の生

活は、たゞへ外的には如何ほど華麗でも、内的には如何に不確實であるかは改めて言ふ迄もない。世には綱渡りの如き生活をしながら、それで外見上成功してゐる人もあるので、道德的修養を以て生活の伸路に關係しないかの如くに誤認する人もあるが、斯くの如きは眞に欺瞞に一時を糊塗して居る者と言はねばならぬ。總じて自ら恥づる處なき道を辿り、自己の能力を充分に發揮して、生活の伸路を開拓して行くといふことは、陳腐なやうでも、實は永遠に互る生活の原則である。

最後に確實生活の第三綱領は、宗教的^二信念^一に安住する事である。由來吾等の生活には種種の不安苦痛は必然的に伴ふものである。腕があり、徳行に不斷の注意を怠らぬ人でも、必ずしも常に幸福な生活を送り得ると限つてはゐない。時には慮外の不幸に逢つて悲歎失望の淵に沈まねばならぬ事も屢あるものである。特に今後

生活上の壓迫が益々激甚となり、生存競争の熾烈なるにつれて、劣者は勿論のこと、優者と雖も尙その背後には幾多の痛苦悲哀が纏はつて來るものと覺悟せねばならぬ。斯かる場合に於ける最後の慰安・光明は、どうしても宗教的の信念を措いて他に求むる道がないのである。宗教的の信念のある者は、如何に生活に疲れても、常に其處に暖かな慰安を感じ、一道の光明を認むる事が出来るのである。而してこは、臆て吾等の生活に對する偉大なる支持となるもので、眞の確實生活は、茲に至つて始めて不動の地位に到達するのである。宗教を以て老人の退屈しのぎと考へるが如きは、信念と生活との根本關係に對して未だ眞に知る所が無いのに起因する。

以上少しく余の所信を開陳したのであるが、如何に述べた所で、確實生活の根本と言へば、此等三綱領に總括し得るのである。活動の源泉も此處にあり、調和の契機點も發展の基礎も此處に置かれ

るのであつて、生活の要諦は歸する所この三綱領の外にはないと思ふ。少くも余自身としては、此の確信の下に余の生活を規定して、専ら努力してゐるのである。(木村泰賢「解脱への道」)

二一 世界の四聖上

生れて一代の宗師となり、死して百世の儀表となる聖人にあらざれば、誰かこれを能くせむ。釋迦、孔子、ソクラテース、基督の四人、世呼んで世界の四聖と稱す。宜なるかな。

釋迦は西曆紀元前凡そ六百年の頃、印度迦毘羅國の王家に生る。父は淨飯王、母は麻耶夫人、その本名は悉達多といふ。釋迦は伽毘羅王家の族名にして、佛陀はその出家成道後の尊號なり。釋迦、身は一國の太子に生れけれども、夙に思を人生の問題に潛め、二十九の歳、その妻子を捨てて城を逃れ、山林に隠れ、道を修むる事六年、終に人

(二) ヒマラヤ山の南麓、ガンヂス河上流一帯の地。

生の奥義を極め、無上の正覺に徹底せり。爾來五十餘年の間、北天竺の各地に巡錫して教化を布き、年八十餘歳にして跋提河の邊に歿す。今の佛教は即ち釋迦一代の教訓に基く。蓋し釋迦の當時、印度には幾多の哲學ありき。然れども徒に思索の高遠を欽びて、人生の疑問に適切ならず、偏に幽玄なる談理と慘澹たる苦行とによりて安心の道を求めたり。その流派を樹てて相争ふ所は畢竟名目の優劣のみ、未だ一世の元元をして歸命の大道に就かしむるに足らず。釋迦この間に生れ、その廣大なる慈悲と無邊なる智慧とを以て、一世の木鐸となり、衆民をしてその歸依する所を知らしめたり。

(三) 孔子、名は丘、孔子はその尊稱なり。今を去ること二千四百餘年の昔、支那の魯國に生る。幼にして學を好み、禮を習ふ。壯年の頃より魯國の官吏となり、傍弟子を教へて夙に令聞あり。學徳愈進む。魯の定公の時に至り、擢でられて大司寇の職に就く。治績大いに擧り、内外

(四) 景公。

その風采を想望す。時に齊侯、魯國の日に盛大に赴けるを嫉み、謀を構へ、定公をして孔子を用ひざらしむ。孔子時運の非なるを見、五十六歳の老軀を挺し、門下の高足を率ゐて四方に遊説を試みぬ。

當時の支那は所謂春秋戰國の亂世なり。周の王室は名のみにして、君臣の大義は蕩然として地を拂へり。或は臣にしてその君を弑する者あり、子にしてその親を害する者あり、強は弱を呑み、大は小を併せ、權力の外に道義あるなし。教化の陵夷、風俗の頽廢、未だ曾てこの時の如きはあらず。孔子既に志を魯に得ず、乃ち慨然として故國を出で、大義名分を天下に唱へて、狂瀾を既倒に廻さむとす。志や高且つ大なりと謂ふべし。かくの如くにして四方を漂浪すること十三年、時非にして道容れられず。世また耳を名教に傾くる者なし。ここに於て、已むを得ず、老脚蹉跎として再び魯に歸り、歎じて曰く、「嗚呼、吾が道遂に窮す、世遂に吾を知る者なきか。」と。門弟子貢慰めて

曰く、「何ぞ夫子を知る者なからむや。孔子答へて曰く、「天を怨みず、人を尤めず、下學して而して上達す。吾を知るものはそれ天か。君子は歿して名の稱せられざるを病む。吾が道行はれずんば、吾何を以てか後世に見えむ。」と。後幾許もなくして歿す。時に年七十三。

ソクラテースは希臘の雅典府に住める一彫刻師の子なり。その生れたるは西曆紀元前四百七十年の頃にして、釋迦孔子と年を隔つること凡そ八九十年なり。東西の聖人殆ど時を同じうして世に出でたるは奇なりと謂ふべし。希臘の當時は所謂詭辯學派の跋扈せし時代にして、知識は名目の争に留まり、道德は空文の上のみに貴ばれたり。その狀猶釋迦當時の印度の如く、人生社會の實際に關して殆ど裨益する所なかりき。ソクラテースは慨然として時弊の救済を以て自ら任じ、盛に道を講じ、理を談じ、諄諄として倦まず。詭辯學者の輩に遇へば、則ちその獨得の論法を以て辯難攻撃して、一

(一) Socrates.
(B.C.469—399)
(二) Athens.

歩も假借せず。侃諤の正義と其の稀代の雄辯と相伴なひて、一世を風靡せり。

然るに「喬木は風に折らる。」といふ喩に洩れず、羣小のソクラテースに快からざるもの相計りて、國法に背けるものとしてソクラテースを讒訴せり。その訴狀に曰く、「ソクラテースは國教を信ぜずして異教を創め、以て人心を惑亂せり。宜しく國法によりて死刑に處すべし。」と。ソクラテースが此の讒訴に對する抗議は實に壯快を極めたるものにして、慨世憂國の至誠を以て國民に訴ふところ。語語傲慢不遜なりとなして、死刑を宣告せり。ソクラテース泰然として驚かず、曰く、「命のみ。」と。その獄中にあるや、常に門弟子を集めて、生死・靈魂・未來の事を説き、人の脱獄を勸むるものに對しては、乃ち答へて曰く、「予は唯正義に導かれむのみ。死又何爲るものぞ。人生の幸福

- (一) Asclepias. 希臘の醫術の保護神。
- (二) Christ. エルサレム市の西南五哩半にあり。
- (三) Jesu. (英) Josua. (ヘブリュー)
- (四) Bethlehem.
- (五) Joseph.
- (六) Maria.
- (七) Yohannes.

は靈魂の上に在るを知らずや。終に從容として毒を仰いで歿す。將に歿せむとするや、弟子遺言を求む。ソクラテース曰く、爾一雞を以てアスクレピアスの神に捧げよ。蓋し會病みし時、平癒を祈りて謝を致すことを忘れしが爲ならむ。希臘の聖人ソクラテースはかくの如くにして逝きぬ。年七十。

基督は本名耶蘇といふ。基督とは膏灌がれたる者といふ義にして、教徒の奉れる尊稱なり。猶太のベツレヘムに生る。その生後四年を以て、西曆紀元第一年となす。父はヨセフと呼べる賤しき木匠にして、母の名をマリヤといふ。長じて三十歳の頃、豫言者ヨハネの洗禮を受けて、始めて傳道の生涯に入り、爾來三年の間、猶太の各地を歴遊し、諸の迫害に屈せずしてその福音を傳へたり。抑、當時は羅馬帝國の榮華その極に達し、禍亂の萌芽その中に胚胎し、災異、荐に至りて、天下寧日なし。殊に基督の故國なる猶太は久しく暴君の收斂

- (八) Jerussarem. パレスティナの都府、地中海岸より東方約三十五哩。

に疲れ、異邦人の侮慢を被れり。民衆は徒に珍奇の淫祠を崇拜して益、放縱の俗に流れ、學者は詭辯を弄びて空しく人を惑はすのみ。ここに於て一世の人心は悉く偉人の現出してこの暗黒の社會を照破せむことを渴望せり。基督この間に生れ、自ら救世の使命を負へる神の子と稱し、昂然としてその偉大なる新教理を宣傳せり。遠近靡然としてこれに赴く。僧侶、學者、官吏等はこれを喜ばず、もつて猥に新法、異説を唱へて民を迷はすものなりとなし、基督を捕へて磔殺の刑に處す。基督豫めこの事あらむを慮り、晏然として騒がず、靜に祈りて曰く、神よ、かれ等を許せ。かれ等は其の爲すべき所を知らざればなり。其の刑場に赴くや、路傍に哀哭する女子を顧みて曰く、エルサレムの女子よ、吾が爲に哭くことなかれ。唯おのれとおのれの子の爲に哭け。かくの如くして基督は三十三年の短命を以て十字架上の露と消えぬ。基督の死後、その弟子達は激烈なる迫

害に抵抗して、その教を天下に弘む。基督教即ちこれなり。

二二二 世界の四聖 下

以上は四聖の略傳なり。その人物事蹟の高大にして雄偉なる、永く後人の景慕し、崇拜すべき所なり。四聖の中、釋迦を除きては、何れも轉軻不遇の中にその生を終へたり。孔子は志を四方に得ず、その經綸を抱いて空しく咏歎の間に歿せり。ソクラテースと基督とは何れも讒奸の手に罹り、或は毒を仰ぎ、或は盜賊と並びて十字架上に磔殺せられたり。慘澹たりと謂ふべし。然れども此等の人の志す所は天下、後世に在り。現世の禍福と一身の安危とは毫もその顧慮する所にあらず。故にその死に就くや晏然として猶歸するが如し。孔子はその身の不幸を憂へずして、却て「吾が道行はれずんば、吾何を以てか後世に見えむ」と嗟歎せり。釋迦は衆生の爲に妻子と王位

とを抛擲して、食を路傍に乞へり。ソクラテースは死罪の脅迫に遇うて、揚言して曰く、「正義を信ずるものにとりて、死はた何爲るものぞ。吾をして一日の生あらしめむか、その一日即ち國民の迷を醒さざるべからず」と。基督は己を罪に陥るるものの爲に神に祈りたり。嗚呼、何ぞその慈悲の廣大にして無邊なる。

四聖はその生れたる處と時を異にす。故にその教理にも亦多少の差異無きを得ず。今その要略を擧ぐれば左の如し。

釋迦の教理は、煩惱を斷滅して涅槃に達するを主旨とす。それ人生は苦に始まりて苦に終る。生、老、病、死、孰れか苦に非ざるべき。故に吾人は現在を苦界と觀ぜざるべからず。而して苦の原因は情慾に在り。情慾の原因は、我の一念に執着するに在り。故に吾人は、我の一念を脱却して、無我・無念の境界に達せざるべからず。これ人生究竟の樂地にして、涅槃即ちこれなり。

孔子の教は身を修め、家を齊へ、天下を治むるに在り。而して身を修むる本は孝に在り。故に孝は百行の本なり。君臣の義、父子の親、夫婦の別、長幼の序、朋友の信、皆これに基礎を置く。人は生れながらにして美德を天に稟くれども、後天の氣質によりて之を完うする事能はざるもの多し。教育の要ここに於てかあり。既に教育を受けて身既に修まらば、家おのづから齊ふべく、家齊はば國おのづから治まらべく、國治まらば天下おのづから太平なるを得べし。故に孔子の教は一身の修養に始まり、治國、平天下に終るものと見るを得べし。

ソクラテースの教は所謂知徳合一説なり。思へらく、眞正の知識は即ち道德なり。故に行ふと知るはもと一體のみ。知つて而して行はざると、行うて而して知らざるときは、共に知識、道德の眞正なるものに非ず。眞理を確信し、その實行を以て最上の義務となせば、正

*
新約全書馬太傳
第五・第六・第七
章。

義おのづからその中に在り。正義は靈魂の満足なり。而して靈魂は肉體と異にして、不朽不滅なるものなり。故に人の正義を行ふ、現世の利害は決して顧慮すべきに非ず。道德は富貴の爲に存せず。然れども富貴は道德の中に在り。と。

基督の教は愛の教なりと稱せらる。所謂山上の垂訓は三年傳道の極意を包括するを以て、左にその大略を擧げむ。曰く、心の貧しきものは福なるかな、天國はその人の有なればなり。悲しむものは福なるかな、その人は慰めらるべければなり。飢ゑ、渴く如く義を慕ふものは福なるかな、その人は飽くことを得べければなり。憐むものは福なるかな、その人は憐みを得べければなり。心の清きものは福なるかな、その人は神を見るべければなり。惡に敵すること勿れ。人若し汝の右の頬を打たば、左の頬をも轉じて之に向けよ。汝の隣人を慈しみて、汝の敵を愛せよ。人に見せむ爲に義をその前に行ふこ

と勿れ。右の手に爲す所を左の手に知らしむること勿れ。偽善者の行に倣ふこと勿れ。隠れたるを鑑み給ふ神は顯あかしに報いたまふべければなり。人は神と財とに兼ね事ふること能はず。人を是非すること勿れ。人の目にある塵を見ながら、何ぞ己が目にある梁木を見ざる。汝等求めよ、然らば與へられむ。尋ねよ、然らば遇はむ。叩け、然らば啓かれむ。窄き門より入れ。沈淪に至る門は闊く、その路は大きく、これに入るものは多し。嗟吁、いかに生命に至る門は窄く、その路は細く、これを得るものの尠きぞや。凡そこの訓を聽きて行ふ者は磐の上に家建てたる智者の如く、聽けども行はざる者は沙上に屋を架せる愚人の如し。基督教の精髓は後世の人如何なる色彩を加ふとも、畢竟この山上の垂訓を出でず。

かくの如きは四聖の傳記及び教義の大要なり。嗚呼、四聖逝いて既に幾千年ぞ、而してその教の今なほ凛凛として生氣あるを見よ。

世界累代の幾億兆の民衆は、此等聖人の教に憑りてその道念を養ひ、その安心を求むるなり。四聖の如きは實に人類の永遠の救濟者なり。謂はざるべからず。その遺徳の高大なること、夫れ何を以てか之に比せむや。(高山樗牛―樗牛全集)

二三 落花の雪

(一) またや見む交野のみ野の櫻狩花の雪ちる春の曙(新古今集、藤原俊成)
(二) 朝まだき嵐の山の寒ければ紅葉の錦着ぬ人ぞなき(拾遺集、藤原公任)

落花の雪にふみ迷ふ、交野の春の櫻がり、紅葉の錦着て歸る、嵐の山の秋の暮、一夜をあかす程だにも、旅寢となれば物うきに、恩愛のちぎり淺からぬ、わが古里の妻子をば、ゆくへも知らずおもひ置き、年久しくも住みなれし、九重の帝都をば、今を限こかへりみて、思はぬ旅に出で給ふ、心のうちぞあはれなる。

憂きをばさめぬ逢阪の、關の清水に袖ぬれて、末は山路をうち出の濱、沖を遙に見わたせば、潮ならぬ海にこがれ行く、身をうき舟の

(一〇) 近江國蒲生郡。また蒲生野ともいふ。近江より朝立ちくればうれの野にたづぞなくなるあけぬこの夜は(古今集、讀人知らず)

(一一) 白露も時雨もいたくもる山は下葉残らず色つきにけり(古今集、紀貫之)

(一二) さよ千鳥聲こそ近くなるみ湯傾く月に汐やみつらむ(新古今集、藤原季能)

浮き沈み、駒もごころと踏みならず、瀬多の長橋うち渡り、行きかふ人にあふみ路や、世をうねの野に啼くたづも、子を思ふかごあはれなり。時雨もいたくもる山の木の下露に袖ぬれて、風に露ちる篠原や、篠わくる道を過ぎゆけば、鏡の山はありとても、涙にくもりて見え分かず。物をおもへば夜のまにも、おいその森の下草に、駒を駐めてかへりみる、故郷を雲やへだつらむ。番場醒ヶ井、柏原、不破の關屋は荒れはてて、なほもるものは秋の月、いつかわが身のをはりなる、熱田の八つるぎ伏拜み、汐干にいまやなるみ湯、傾く月に道見えて、明けぬ暮れぬと行く道の末はいづこことほたふみ、濱名の橋の夕汐に、ひく人もなき捨小舟、沈み果てぬる身にしあれば、誰かあはれとゆふ暮の、入相なれば今はとて、池田の宿に着きたまふ。
旅館の燈かすかにして、雞鳴曉を催せば、匹馬風にいばえて、天龍川をうち渡り、小夜の中山越えゆけば、白雲道を埋み來て、そこも

(一三) 年をへてまた越ゆへしと思ひきや命なりけり小夜の中山(山家集)

(一四) 承久三年。(一六)

(一五) (二八六—一八)

(一六) 支那南陽縣の故事。上流に菊ありて、その滴り流に落ち、これを飲めば長壽を得といふ。

(一七) 山城國葛野郡嵯峨なる龜山の驛宮。

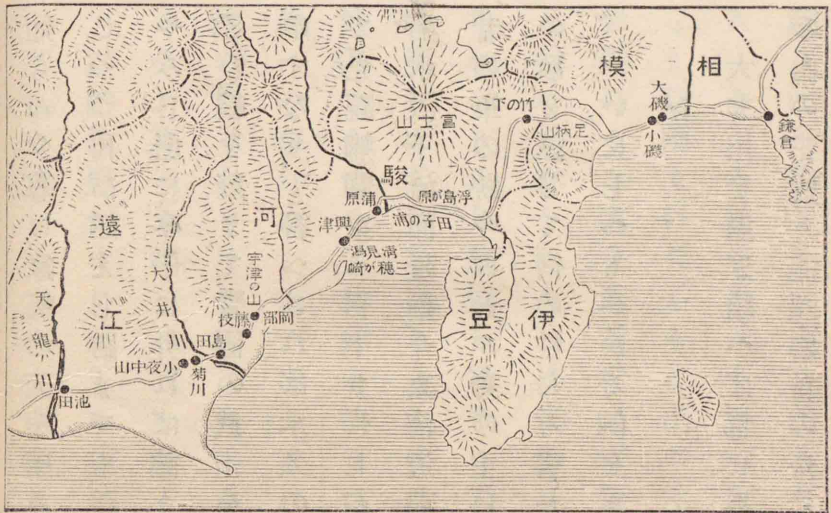
知らぬ夕暮に、家郷の天を望みても、昔西行法師が命なりけり。詠じつつ、再び越えし跡までも、羨しくぞ思はれける。隙ゆく駒の足はやみ、日已に亭午に昇れば、餉まゐらす程とて、輿を庭前に昇きこごむ。轅を敲きて警固の武士を近づけ、宿の名を問ひ給ふに、菊河と申すなり。と答へければ、承久の合戦の時院宣書きたりし咎によりて、光親卿關東へ召下されしが、この宿にて誅せられし時、昔南陽縣菊水、汲下流而延齡。今東海道菊河、宿西岸而終命。と書きたりし、遠き昔の筆の跡、今はわが身の上になり、あはれやいとご勝りけむ、一首の歌を詠じて、宿の柱にぞ書かれける。

いにしへもかかる例をさく河のおなじ流に身をやしづめむ
大井川を過ぎ給へば、都にありし名を聞きて、龜山殿の行幸の嵐の山の花盛り、龍頭、鶴首の舟に乗り、詩歌、管絃の宴に侍りしことも、

(一) 伊勢物語の主人
公或はその著者
なりといふ。

(二) 駿河なるうつの
山べのうつつに
も夢にも人にあ
はぬなりけり
(伊勢物語)

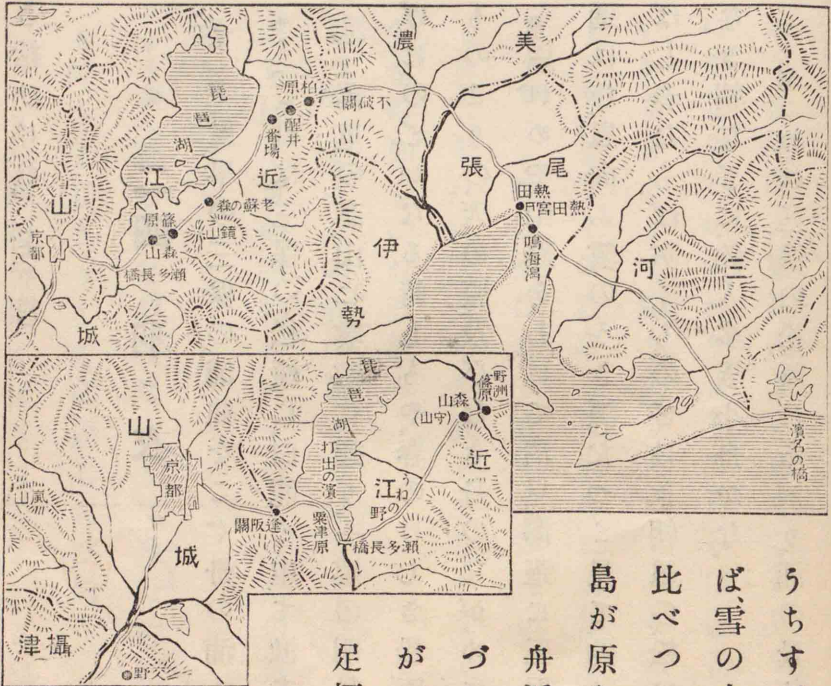
(三) 清見濁浦風寒き
夜な夜なほ夢も
ゆるさぬ波の關



今は再び見ぬ夜の夢となりぬこ
思ひつづけ給ふ。
島田藤枝にかかりて、岡べの眞
葛うら枯れて、もののかなしき夕
暮に、宇都の山べを越えゆけば、葛
楓いと繁りて道もなし。昔業平の
中將の、すみかを求むとて、東の方
へ下りしに、夢にも人にあはぬな
りけり」と詠みたりしも、かくやと
思ひしられたり。清見濁を過ぎ給
へば、都にかへる夢をさへ、通さぬ
波の關守に、いと涙を催され、む
かひはいづこ三保が崎、興津蒲原

守(新後撰集、院
大納言典侍)

(四) 富士の根の煙は
猶も立ちのぼる
上なきものは思
なりけり(新古今
集、藤原家隆)



うちすぎて、富士の高嶺を見給へ
ば、雪の中よりたつ煙上なき思に
比べつつ、明くる霞に松見えて、浮
島が原を過ぎゆけば、潮干や淺き
舟浮きて、おり立つ田子のみ
づからも、うき世をめぐる車
がへし、竹の下道ゆきなやむ、
足柄山のたうげより、大磯小
磯見おろして、袖にも波
はこゆるぎの、いそぐこ
しもはなれれども、日數
積れば、七月二十六日の
暮ほごに、鎌倉にこそ着

き給ひけれ。(太平記)

二四 羽衣

(一) 漁夫白龍。

(二) 風早の三保の浦曲を漕ぐ舟の舟人騒ぐ浪立つらしも(萬葉集)

(三) 他の漁夫。

(四) 萬里高山雲乍敷、一樓明月雨始晴。

(詩人玉屑)

(五) 風向ふ雲のうき浪立つと見て釣せの先にかへる舟人(冷泉爲相)

ワキ(一)「聲」風早(三)の三保の浦曲をこぐ舟の、浦人さわぐ浪路かな。

サシ「これは三保の松原に、白龍と申す漁夫にて候。

萬里(四)の高山に雲忽に起り、一樓の明月に雨はじめて晴れたり。

げにのどかなる時しもや、春のけしき松原の、浪立ちつづく朝霞月

ものこりの天の原及びなき身のながめにも、心空なるけしきかな。

歌、忘れめや、山路をわけて清見瀉、遙に三保の松原に、立連れいざや

通はむ。風向(五)ふ雲のうき浪たつと見て、釣せで人や歸るらむ。待てし

ばし春ならば、吹くものどけき朝風の、松は常磐の聲ぞかし。浪は音

なき朝なぎに、釣人多き小舟かな。

ワキ詞「われ三保の松原にあがり、浦の景色を眺むる所に、虚空に花

ふり音楽聞え、靈香(六)四方に薰ず。これ只事と思はぬ所に、これなる松

に美しき衣かかれり。よりに見れば、色香妙にして常の衣にあらず。

いかさまとりて歸り、古き人にもみせ、家の寶となさばやと存じ候。

シテ詞「なう、その衣はこなたのにて候。なにしに召され候ぞ。

ワキ詞「これは拾ひたる衣にて候程に、とりて歸り候よ。

シテ詞「それは天人の羽衣とて、たやすく人間に與ふべき物にあらず。

本(七)の如くにおき給へ。

ワキ詞「そもこの衣の御主とは、さては天人にてましますかや。さも

あらば末世の奇特に、ごごめおき、國の寶となすべきなり。衣を返す

事あるまじ。

シテ詞「悲しやな、羽衣なくては飛行(八)の途も絶え、天上に歸らむこと

も叶ふまじ。さりこては返したび給へ。

ワキ「この御詞を聞くよりも、いよいよ白龍力を得、本よりこの身は

心なき、天の羽衣とりかくし、叶ふまじとて立ちのけば、
シテ「今はさながら天人も、羽なき鳥の如くにて、上らむとすれば衣なし。」

ワキ「地にまた住めば下界なり。」

シテ「とやあらむ、かくやあらむと悲しめど、」

ワキ「白龍衣を返さねば、」

シテ「力及ばず、」

ワキ「地「せむかたも、」

地「涙の露の玉鬢、かざしの花もしをしをと、天人の五衰も、目のまへに見えて、あさましや。」

* 丹後風土記に見ゆる歌。

シテ「天の原ふりさけみれば霞立つ、雲路まごひてゆくへしらずも、地「すみ馴れし空にいつしかゆく雲の羨しきけしきかな。迦陵頻伽のなれなれし、聲今さらにはづかなる、雁がねの歸りゆく、天路を聞

けばなつかしや、千鳥鷗の沖つ浪行くか歸るか春風の空に吹くま
でなつかしや、

ワキ「いかに申し候、御姿を見たてまつれば、あまりに御痛はしく候程に、衣を返し申さうするにて候。」

シテ「あら嬉しや、こなたへ給はり候へ。」

ワキ「しばらく承り及びたる天人の舞樂、ただ今ここにて奏し給はば、衣を返し申すべし。」

シテ「嬉しや、さては天上に歸らむことを得たり、この歡に迎もさ
らば、人間の御遊のかたみの舞、月宮をめぐらす舞曲あり。ただ今こ
こにて奏しつつ、世のうき人に傳ふべし。さりながら、衣なくて叶
ふまじ。さりさては、まづ返し給へ。」

ワキ「いや、この衣を返しなば、舞曲をなさでそのままに、天にやあ
がり給ふべき。」

シテ詞「いや、疑は人間にあり、天に偽なきものを。
 ワキ「あら恥しや、さらばとて、羽衣をかへし與ふれば、
 シテ「少女は衣を着しつつ、霓裳羽衣の曲をなし、



能の羽衣

ワキ「天の羽衣風に和し、
 シテ「雨に濕ふ花の袖、
 ワキ「一曲をかなで、
 シテ「舞ふとかや、
 地「東遊の駿河舞、この時やはじめなるらむ。
 地「それ久かたのあめさい
 つは、二神出世のいにしへ、十方世界を定めしに、空はかぎりもなければとて、久かたの空とは名附けたり。
 シテサシ「なかんづく月宮殿のありさま、玉斧の修理とこしなへにし

て、

地「白衣、黒衣の天人の、數を三五に分つて、一月夜夜の天少女、奉仕を定め役をなす。

シテ「我も數ある天少女、月の桂の身をわけて、假に東のするが舞世に傳へたる曲とかや、^(ウキ)春霞たなびきにけり、久かたの、月の桂も花やさくげに、花桂色めくは、春のしるしかや、おもしろや、天ならで、^(ウキ)ここも妙なり、天津風雲の通ひ路吹きとぎよ、少女の姿しばしとごまりて、この松原の春の色を三保が崎、月清見瀉、富士の雪、いづれや春の曙、たぐひ浪も松風も、のどかなる浦のありさま、その上天地は、何を隔てむ玉垣の、内外の神の御すゑにて、月も曇らぬ日の本や、
 シテ「君が代は、あまの羽衣まれに來て、

地「撫づとも盡きぬ巖ぞこ、聞くも妙なり東歌、聲そへて、かずかずの箏、^(ウキ)箏、琴、篋、篋、孤雲の外に、充ち満ちて、落日の紅は、蘇命路の山を寫し

(ウキ) 春霧棚引きにけり、久方の月の桂も花や咲くらむ
 (後撰集、紀貫之)
 (ウキ) 天津風雲の通ひ路吹きとぎよ、少女の姿しばしとごめむ
 (古今集、長岑宗貞)

(ウキ) 君が代は、天の羽衣稀にきて、撫づとも盡きぬ巖なるらむ
 (拾遺集、讀人知らず)

て、緑は浪に浮島が、拂ふ嵐に花ふりて、げに雪をめぐらす白雲の袖ぞ妙なる。

シテ「南無歸命月天子、本地大勢至。」

地「東遊の舞の曲。(序の舞)」

シテ「或は天つみ空の緑の衣。」

地「又は春立つ霞の衣。」

シテ「色香も妙なり、少女の裳。」

地「左右左、左右颯颯の花をかざしの天の羽袖、靡くも返すも舞の袖。(破の舞)」東遊のかずかずに、その名も月の宮人は、三五夜中の空に又、満願・真如の影となり、御願圓滿、國土成就、七寶充滿の寶をふらし、國土にこれを施し給ふ。さる程に時移つて、天の羽衣浦風に、棚びき棚び

く、三保の松原、浮島が雲の、愛鷹山や富士の高嶺、かすかになりて、天つみ空の霞にまぎれて失せにけり。(謠曲)

二五 富士の山

○

讀人 不知

ぬば玉の木の、下闇の黒米もつきいでてこそしらげそめけれ

○

鯛屋 貞柳

富士の山夢に見るこそ果報なれ路銀もいらす草臥れもせず

散ればこそいとご櫻はめでたけれれどもけれれども

さうぢやけれれども

○

唐衣 橋洲

うつて来る波の受太刀満つ潮のさしこころ得て飛ぶ千鳥かな

(一) 永正(三三六—三三八)狂歌合に見ゆ。

(二) 大阪の人、狂歌の一派鯛屋派の祖、又油煙齋と號す。(三三三—三三九)

(三) 散ればこそいとご櫻はめでたけれ、憂世に何か久しかるべき(伊勢物語)

(四) 小島氏。(三四五—三四六)

(一) 蜀山人。

一めんの花は
碁盤の上野山
くろもん前に
かかるしら雲
蜀山

(二) 杜鵑なきつる方
を眺むれば唯有
明の月を殘れる
(百人一首 後徳
大寺左大臣)
(三) 山崎氏。(三三九一
二四五六)

かぎりなき君がよはひやうらやまむつるは千年龜は
萬年

○

すみだがは今はあづまのみやこごり業平などは五
中將

(四) 方赤良



四方赤良筆蹟

ほこごぎす啼きつるあとにあきれたる後徳大寺のあ
りあけのかほ

○

やれやれと潮のひるめしいそぐなり青海原のへるに
まかせて

(五) 朱樂菅江

(四) 渡邊氏。(三三一
二四七)

(五) 石川雅望。六樹
園をも號す。(二四
三二三四九)

歌よみはへた
こそよけれ天
地のうこきい
たしてたまる
ものかは
飯盛

(六) 花川氏。又、狂
歌堂を號す。(二四
三二三四九)

田樂の木の芽にはらもはるの野や霞の帯をゆるめて
ぞ喰ふ

○

世わたりの道にふたつの追分やたからの山に借金の

山

(五) 宿屋飯盛

(四) 奎網



宿屋飯盛筆蹟

あらそはぬ風のやなぎの絲にこそ堪忍袋縫ふべかり
けれ

○

(六) 鹿津部眞顔

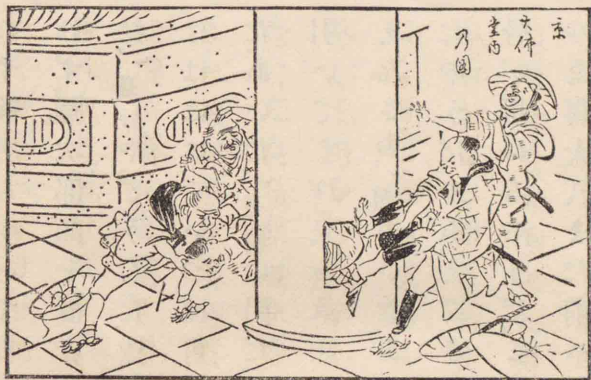
*京都

二六 大佛殿の柱

*大佛殿方廣寺本尊は盧舍那佛の座像、御丈六丈三尺、堂は西向にして、東西二十七間、南北は四十五間あり。彌次郎喜太八ここに法施し奉りて、彌彌なんと話に聞いたよりか、豪勢なもんぢやあねえか。あの斯うして御座るお手のひらへ疊おが八疊しけるさうだ。喜喜狸狸と同じことだな。彌彌勿體ねえ事を言ふもんだ。あの鼻の孔から人が傘をさして出られるとさ。さあ、御後へ廻つて拜まう。おやお、お背中中に窓があいてゐらあ。喜喜あれは大かた潮を噴く處だらう。彌彌鯨鯨ぢやあるめえし。喜喜おやおや、あれみんなが柱の孔を潜つて居るは。彌彌ほんにこいつは奇妙奇妙。と、御堂の柱の下には丁度人の潜るだけ切抜きたる孔あり。田舎道者者ども戯れに之を潜り抜ける。喜太八同じく潜り、「これや面白え。併しおいらは潜れるが、彌次さんは太つて居るから抜けれめえ。彌彌俺だこつて何これが。」と喜太八を引きのけ、四つば

ひになつて、柱の孔へからだ半分ほど這入りかけて、一向に抜けられず。後戻らうとするに脇差の鐔が横腹につかへて痛み、こらへられず。彌次郎顔を眞赤になし、あいた、あいた、これやひよんな事をした。喜喜おや、どうした、抜けられねえか。彌彌これ、手を引張つてくりや。喜喜「ははは、こいつは可笑しい。」と、彌次が両手をぐつと引張る。彌彌あいた、あいた。喜喜弱い男だ。ちつと辛抱すればいい。彌彌あそこの方から足を引いてくれる。喜喜承知承知。と後へ廻り、兩の足を捕へ、やあ、えんさあ、えんさあ。彌彌あいた、あいた。喜喜ちつとこらへなせえ。よつほど出かけたやうだ。やあ、えんさあ、えんさあ。彌彌ああ、待つてくれ、待つてくれ。腰骨が折れるやうだ。これや、やはり前の方から引出してくれ。喜喜「言ふゆゑ、喜太八また前へ廻り、兩手を捕へて引く。やあ、えんさあ、えんさあ。それ又こつちへよつほど出て來た。彌彌これやたまらぬ。あいた、たた。喜太八、これではいかぬ。初手のやうに、又あとへ引戻してくれ。」

喜「ええ、いろいろな事を言ふ。」と又うしろから足を捕へ、「やあ、えんさあ、えんさあ。」彌待て待て待て。これやどうでも前の方から引いて貰はう。「喜、ええ、そんなに前へ廻つたり、後へ廻つたり、引出しては引戻し、何時迄も果しがねえ。これや好い算段がある。」と、側に見てゐたりし參詣の人を頼みて、「もし、どうぞこちらからお前ひつはつて下さいませ。わしがあつちへ廻つて足を引きずり出しますから。」彌ばかあ言ふな。兩方から引張つては出る瀬がねえ。「喜、出る瀬がなくても、兩方から引張ると、前へ廻つたり、後へ廻つたりする世話がなくていいわな。」參詣の人「いや、兩方からあの方のさんの骸を引きのばしたら、つい出られさうなもんぢやろ



い。「喜、これや好い事がある。酔を一升も買つて来て、彌次さんお前に飲ませよう。」彌なぜ、酔を飲むとどうする。「喜、はて、酔を飲むと瘡せるといふことだから。」參詣の人「ははは、そないな事いうたかて、いんまの間に合ふこつちやないさかい、かうさんせ。何處ぞへいて、槌借つてきさんして、頭を後の方へ打込まんしたがよいわいの。」喜なるほど、こいつが早い理屈だ。併しそれでは命があるめえ。「參詣の人」されば、そこは、どうも請合はれんわいの。「喜、はて、何か好い智慧はあるめえか。」參詣の人「ぢや、も一つわしが智慧を貸そわいの。何ぢやろと、あの方の骸をやはらかにして引出すがよかるさかい、斯うさんせ。土砂とて来てかけさんせいの。」田舎者「すんだら土砂のうぶつかけずと、一ばんの桶さあ買つて來なさる。手足をちとべしをん曲げたら這入るべいのし。」彌「ええ、いめえ、ましい事をいふ。むだ所ぢやねえ。喜、太八、早くどうぞしてくれぬか。」喜「待ちなよ。ははあ、おめえ脇差の鐔が横

つはらへこだはつて、痛えのだ。こ手を差入れてひねくり廻し、漸う脇差を抜いて取る。彌いかさま、これでどうやらくつろぎがあるやうだ。喜これごれごれ、いや時にごなたぞ前の方から押して下さいませ。わしが足を持つてこつちへ引出しますから。やあ、えんさあ、えんさあ。参詣の人、それ出るわいの、まちつとだ、息ままんんせ。彌あ、うううう。ああ痛え痛え。喜占めたぞ、えんやあ、えんやあ、それや出たぞ出たぞ。漸うのことに引出せば、彌次郎は大汗をふきふき、ほつと溜息つきながら、やれやれ、有りがてえ、これやごなたも御苦勞で御座い申した。これ、着物が磨りきれて肋骨がびりびりする。

傘さして出るお鼻より柱なるあなおそろしや身をすぼめても

かく詠み興じて大わらひとなり、それより御境内を巡り、蓮花王院の三十三間堂にて、

いやたかき五重の塔にくらべ見む、三じふ三げん堂のながさを

これより此の御門前を北へさして行くに、往來殊に賑はしく、げにも都の風俗は男女ともに何處となく柔和温順にして、馬士うまぢ徒荷ぢ持もまでも洗濯布子の糊もこはきを折目高たかに着きこなして、あのおしやんすことわいな。ごなまめきたるもをかしく、二人は興に乗じ、目に見る物毎に珍しく辿りゆく。(十返舎一九―東海道中膝栗毛)

大正十四年四月二十二日
 教育部省檢定中國語科用校

發行所

（東京市神田區錦町一丁目
 振替口座東京四九九一番）

株式會社

明治書院

電話神田(25) 一四一四番



大正十三年十月二十四日印
 大正十三年十月二十七日發行
 大正十四年一月十七日訂正印刷
 大正十四年一月二十日訂正發行

編者 佐々政一
 補修者 大町芳衛
 補修者 武島又次郎
 補修者 杉敏介
 印刷者 東京市神田區錦町一丁目十番地
 株式會社 明治書院
 取締役社長 鈴木友三郎

| 定價 | 臨時定價 |
|-------------|-------------|
| 卷一、二、各金四拾壹錢 | 卷一、二、各金六拾八錢 |
| 卷三、四、各金參拾七錢 | 卷三、四、各金六拾壹錢 |
| 卷五、六、各金參拾參錢 | 卷五、六、各金五拾五錢 |
| 卷七、八、各金參拾參錢 | 卷七、八、各金五拾五錢 |

新訂新撰國語讀本卷八終

*Sango Middle School
 S. Yamamoto*

山陽中學校
 第四學年乙組
 山本春三

S. Yamamoto



山陽中學校

山陽中學校
中學校
平

山本

